時を止める能力こそ最強―だと思ったら実は最弱だった！？―

アザロフ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時間を止められたら最強ではなかろうか。止まった時間の中で動けたら最強ではなかろうか。

言っていることはシンプルなことではあるが、やれるかどうかで言えば人にはほぼ不可能。

でも、もしこれが使えるようになったどうだろうか。自在に操れるならば自分を取り巻く世界はどうなるだろうか。

世にある時を止める創作上の人物（キャラクター）は強キャラしかいないのだから強いことは確定的に明らかだ。

転生する前の自分は目立つようなことは控えてきた。目立つと攻撃されるからそれを回避するために。でも時を止められたら変わるはずだ。世界も、自分も。

だからこそ志島十樹（しじまとおき）は転生する時に一つだけ貰える能力を、時を止める能力にした。

それは正解であり間違いであった選択。

しかし転生させた女神イヴにとっては好都合だった故に止めることはなかった。

『小説家になろう』と『カクヨム』にも同時掲載中

目次

第一章一幕　異世界転生ってこんなんだったっけ？ ―― 1
第一章二幕　初めての時止め ―― 24
第一章三幕　時を止める能力は最弱だった？ ―― 45
第二章一幕　始まりはいつも突然に 57
第二章二幕　能闘士の集い（サバト） 64
第二章三幕　時を動かす能力 ―― 73
第三章一幕　特訓 ―― 89
第三章二幕　女神への挑戦 ―― 99
第三章三幕　神の秘密 ―― 108
第三章四幕　肉体の使い方 ―― 118
第四章一幕　人の心神の心 ―― 128
第四章二幕　女神カグヤ ―― 143
第四章三幕　時を動かす能力の新たな可能性 ―― 156
第四章四幕　神の規律 ―― 172
エピローグ ―― 183

第一章一幕　異世界転生ってこんなんだったっけ?

これまでの人生誰かに褒められこそしないものの、罵られるようなことはやってきていないつもりだ。

誰かと喧嘩して怒らせることはあっても殺されるようなことは一切していない。と思う。

だというのにこれはどういうことだろうか?

今日は珍しく朝早くに起きて学校へ行くためにと駅のホームで待っていた。待機列の一番前に立てることに運がいいと喜んでいたのは数分前だったか。

その後車両点検か何かで遅れるというアナウンスがあった気もしたが、来ないという事実しか頭に残っておらず覚えていない。

あったのはホームが通勤通学の人でごった返していたことと、背中を突き飛ばされた感触だけだった。

車両点検が終了し隣の駅を出たと知らせが入ったのは少し前だったか。再開した電車が目前まで迫り汽笛を鳴らしているのが聞こえる。

問題は位置だった。

どうして自分の真横から聞こえてくるのだろう。
そう思った時には既に遅く、自分の、志島十樹（しじまとおき）の記憶はここで途切れたのだった。

がばりと勢いよく起き上がる。
すぐさま全身を弄り体の有無を確認する。
足、有る。
腕、有る。
胴、有る。
頭、有る。
衣服にしても変わりはないようで、ブレザーの学生服のままだった。
生憎と手荷物は消失してしまっているようだが、死ぬほど痛い目にあった記憶があるだけに、五体満足なだけありがたいというもの。
「夢、だったのか？」
重くため息を吐くと脂汗をかいていたことに気付いて拭い去る。
制服のまま寝ちゃったかなと周囲を見回すと、そこで自分の置かれた状況に違和感を

覚えた。
遠くを見れば建物らしいものはほとんどなく、ただだだっ広い空間が視界いっぱいにあるだけ。空が明るいのは好都合だが、見るだけで寂しい景色がそこにあるだけで見慣れたビル群はそこにない。
足元は白い薄雲でふかふかとしているがベッドではない。
幸いなのはこの柔らかい感触のおかげか体の痛みを感じないのはありがたかった。
「でもこの辺のシチュエーションってどっかで見た覚えがあるんだよな」
どこでだったかなと頭をこねくり回していると、声がかかる。
「そこのあなた」
女性の声のようだが周囲を見回しても見当たらず、気のせいかと思い無視をすることに。
「そこのあなたに言っているのです。志島十樹」
するともう一度声がかかる。しかも名指しでだ。
聞いたことがあるような気はするが、でも記憶にはないようで、もしかしてこれは夢の世界なのではと疑い出したところで三度声がかかる。しかも、
「いいからさっさと反応を示せこのグズが!」
この上ない暴言と一緒に。

先程まであった柔らかい声などどこ吹く風とでも言うように乱暴な言葉は続く。
「ほらちゃっちゃとそのまま真っすぐ歩く」
「いや何でだよ。というかあんた誰だよ」
「黙れ。お前に質問する権限は与えていない」
「なんだこいつ。感じ悪いな」
眉間にしわを寄せてぶつくさ文句を言っているとしびれを切らしたのか、
「もういい、飛んでこい」
パチンと指を鳴らすような音が聞こえたかと思った次の瞬間に、視界にあったものが全て変化していた。
何処かの建物の中なのか、周囲のだだっ広い空間は消え失せ、周囲はプリズム状の壁のようなものが囲っていた。但し天井はないのか何処までも伸びており、その先には何も見えない。
「どこなんだ、ここは……」
「あんた本当にグズね。何のためにこれまで情報を与えてきたと思っているの」
先程聞いた声と同じ声音が正面から聞こえてきた。
そこには中空にまるで腰を下ろしているかのような体勢で浮いている女性が一人いた。金髪の長い髪を垂らし彫りがしっかりしている見た目は日本人離れしている。胸

は大きくしっかりと出ているが、素肌は白いヴェールによって全て隠されていた。
「あ、あんた誰だよ」
懸命に取り繕い出た言葉はそれが精々だったが、個人的には動転せずにそのような言葉が吐き出せただけ百点満点をつけてあげたかったのに、
「は、声が震えてるの丸わかりよ。おまけに私の胸と股の中を覗こうとしてるのも」
目の前で見事なまでに見破られ、あまつさえ自分の視線までお見通しだった。
でも仕方がないはずだ。あんなにグラマラスな体と薄い生地で作られた衣服を前に見ないなんて、やっと高校三年になったばかりの自分には酷な話だ。
「見ないやつは見ないわよ童貞。幾つであろうと」
「なんで考えてることが!?」
「神だからよ」
答えになっていないと言い返したかったが、摩訶不思議な体験がこれが事実だとじわじわと教えてくる。
世の中にある創作物の中に異世界に転生だとか異世界に転移するものがある。それらにはこのようなシーンがあった記憶があり、もしかして自分はそれに巻き込まれたのではないかという一つの仮定だ。
もしくはこれは、

「安心しなさい。これは夢でなくて現実よ」
夢と思いかけて即座に否定されてしまった。
「今あんたが思った通りあんたは死んでこれから転生するのよ。異世界にね」
「でもあれは創作物じゃ」
「あんた本当に馬鹿ね。なんであれだけ知れ渡っていると思っているの？　私がこういう時に説明する手間を省くために知識として与えたに決まってるでしょ。人間がそう安々と次元の壁を越えて行けるわけないんだから私がナビするしかないのよ。忌々しいことに」
話の流れから察するに、その仕事を押し付けられているため嫌々やっているということだろうか。
十樹もアルバイトをやっているため、無茶振りで大変な目にあったことは一度や二度ではない。そのためなんとなく親近感を覚えた。
だというのに、
「止めてもらえる。あんたなんかに同情されたくなんてないんだけど」
青い顔をして拒絶されてしまった。
人の純真な心を返せと言いたかったが、その手の返事をしても無駄な気がし諦めることに。

それよりも重要なことがあるからだ。

「なぁ、これが異世界への転生なら何か能力とか貰えるんだよなっ」

能力。

ファンタジックな能力でもサイキックなパワーでも良いから一度は憧れるものだ。男なら幾つになってもそれは変わることがないだろう。

「やっと話が進んだようね。えぇ、あんたが言うように一個だけ上げられるわ。但し私からの助言はなし。あんたが言ったものを私はそのまま上げるだけ」

しかも好きに選べときた。

「ただ多少制限はあるからその場合は口出しするけど」などと言ってはいるが気にするほどでもない。

この手の時は役に立たない能力か超絶的に強い。一部ではチートと呼ばれる能力を強制的にもらえたりするものだが、選んでいいなら最弱にも最強にも慣れるということだ。自分はどれだけ恵まれた条件を提示されているか自覚しているだけに興奮がやまない。

ただ一つと言われた以上下手なものを貰うとその先困ることとなる。ここは慎重に選ぶべきタイミングだ。

ただ気になることもあるため確認を、

「一つと言いながら複数な能力を複合してもやれないし相手の能力をコピーしたところで時間制限があって永久に使えるなんてことはない」

しようとしたが聞きたところを親切に教えてくれた。

内心自称女神という線はあったのだが、ここまで的確に、それも先回りして言い当てられると多少なりとも信じる他なかった。

なら考えることは能力のことだ。

かといって長考はできそうもない。何故ならば女神がガンを飛ばしてきているからだ。さっさとしろという圧がものすごく、焦りが生まれる。

もうちょっと時間があればなと考えたところでふと思いつく。

――あれ、ひょっとしてこれチート級の能力じゃないか？

ひょっとしてどころか世にある創作物の中でも強者の証とでも言うべき能力を閃いた。

これならば全てが自由自在と成りうる。

そう思い宣言する。

「俺に時を止める能力をくれ！」

力の限り叫んだ。

これでこの先何が待っていようと必ず勝てると踏んで、思わず頬が緩むほどの満足感

が心を満たす。
　目の前にいる神も会心の出来に驚いているのか、ポカーンとしているかと思うと腹部を押さえて、次の瞬間には笑い声を上げていた。
「あーはっはっはっは、いーひっひっひ。ま、マジで言ってんの?」
「あ、あぁ、何か可笑しいのか?」
「い、いえ、ぶふぅ。何もおかあはははははは」
　何がそこまでツボに入っているのか理解しかねるが、余程面白かったのかたっぷり十秒も笑いこけ、終わったかと思うと初めて地に足をつけた。
「あー面白かった。笑わせてもらったし早速能力を授けるわ」
　切り替えは早いのか笑っていた痕跡も残さずに指パッチンをすると、自分の中に何かが入ってくる感覚に襲われるも不安も不快さもなく、温かさの方が感じられた。
「これで能力は授けられた。次はっと」
　もう一度指パッチンをすると視界は暗転したかと思い、瞬きを挟んだ次の瞬間には変化し、人が行き交う町の中に出ていた。
「えっらい巻で行くなあの女神」
　想定していた感慨深さもこうまでトントン拍子どころか二三歩先を行かれると何もない。

ここは大通りなのか周囲には異界の人間の生活音で満たされているのに、ワクワク感や驚愕よりも困惑することの方が多くて興が削がれてしまっていた。
「悪かったわね興が削がれて。でも悪いけどあんたの趣味に付き合う気はサラサラないわ」
「なんでいる!?」
斜め後ろにここへ飛ばした神がいたことにまったくもって気が付かず、思わず飛び退いてしまった。
「そういうルールなのよ。忌々しいけど」
「あぁ、転生者にサポート的な感じの」
「は、その辺を考える知恵はあるようね」
褒められているのか貶されているのかいまいち伝わらない物言いだが、気にしたら負けなのだろうかとここは我慢をすることに。
「で、拠点とかあるのか？」
「拠点？　……あぁ忘れていたわ。確かに必要よね」
やや間があったがどうやら思い出したようで、いざ案内してもらおうと足を動かしかけ、止まった。
「さぁ早く私のために私の拠点を探して来なさい」

「おいちょっと待てそれは何の冗談だ?」
いきなり連れてこられ、周りの何故か中世っぽい見た目の世界の知識もないまま放り出されても困るというもの。
最低限資金になりそうなものか、もしくは装備くらい欲しいものだが、
「あるわけ無いでしょそんな便利なもの。調子に乗るなカス」
もらえたのは罵倒だけだった。
色々ここまで言われてきたが、まだ我慢ができる範囲だった。でも思っていた以上に雑に扱われ、しまいには私のために働けと言ってきているのだ。
「ふざけんなこんの駄女神!　お前の言うとおりにずっと動くと思ったら大きな大間違いだぞ!」
「高々人間の分際でよく言うわね。あぁ豚だったかしら」
「豚だぁ?　俺が豚ならその乳はぶら下げたお前は牛か!」
「はぁ、あんた今なんていった?　もう一度言ってみな」
途端に静かになった女神は静かでありながら重い圧力で睨みつけてくる。
ほんの僅か前まで周囲は賑わっていたかのように思えていたが、気付けば静まり返っていた。
これは流石にまずいと思い謝罪しようとしたが、女神が足を地面に踏んづけた着後、

足に浮遊感を覚えるのが先だった。

「は？　あああああああああああああああ！」

地面の上に立っていながら襲われた浮遊感に遅れ、視界いっぱいに世界が広がった。

空は何処までも広く、平原が多いのか山は少なく、遠くに別の町が見えた。今足元に見える町はオレンジ色の屋根と薄い肌色のような壁の建物がずらりと並んでおり、時折木製の建造物やレンガ調のものも目に入った。

こんなに広いんだなこの町。などと考える暇もなくうつ伏せの状態で自由落下は続いていた。街が見渡せるほどの高さから。

速度はぐんぐんと増し、地面の石畳がはっきり見えてきた。だが、それだけでは終わらなかった。

風を切り高速で落下している先には人が三名ほど立っており、こちらに気付く気配はない。

「どーいーてーくーれー！」

懸命に叫ぶも下にいる人は三人とも左右を見るだけで上は見ず、一人視認してくれた時にはもう接触するところだった。

襲う頭部と腹部と足の部分にはこれまで味わったことのない衝撃が走る。

「いってぇ!!　あんのクソ女神、俺を殺す気か！」

しかしまだ反論するくらいの余裕はあったのか、ガバっと起き上がると空に向かって叫び声を上げた。
「そっちにいるわけないでしょマヌケ」
「うおビビった。瞬間移動までできるのかよ」
「誰がここまで運んだと思ってんの。本当に脳みそあるのあんた」
ため息まじりで言われ、苛立ちよりも呆れが強くなりつつあった。
これが慣れなのだろうかと頭をかかえていると、別の者から声がかかる。
「あ、あの!」
「ん?　あんたは?」
声をかけられた方へ目を向けると、そこにはウェーブのかかった栗色の髪を腰まで伸ばした少女がいた。衣服はワンピースなのか上下の境はなく、胸は女神よりも大きく見え、表情を含め大人しい雰囲気をしていた。
「私、あなたの下にいる人たちに囲まれていたんですが、あなたが気絶させてくれたおかげで助かりました」
言われて足元を見ると確かに人を踏んづけていたようで、慌てて降りる。
「別にあんたを助けるためにやったわけじゃないんだけど、助けになったなら良かった」
「うわくっさ。何格好つけてんのこいつ」

「うっさい黙れ！」
「あにおー？」
「あ、あの！」
　目から火花を飛ばし合うが、栗色の髪の少女が間に入り止められることで一時休戦となる。
「あの、あなたはもしかして能闘士（マギア）なのでしょうか？」
「まぎあ？　なんだそれ」
「違い、ましたか？」
　違うかどうかを問われてもそもそもそのような単語は知らないのだが。
　だが女神の方は把握しているのか、即答していた。
「ええそうよ。だからもしよければあなたの家まで案内してもらえないかしら。そこでお茶でもしながら話をしましょ」
「おい何初対面の人に」
「はい喜んで」
「――――いいの!?」
「えっと、何か問題ありましたか？」
　こっちが困惑しているのに疑問で返されても困るのだがと、女神を睨むと顎をしゃく

られた。つまりついて行けということなのだろう。
仕方ないとため息を吐いて了承した。
「いや、それよりも家まで案内を頼んでも良いか」
「はい、こちらです」
笑顔で案内を始めてくれた彼女の足取りは軽やかで、それでも道に不慣れな自分を置いていかないよう速度を合わせてくれる。
何処かの誰かさんと違い気の利く子だなと思っていると、後ろからふくらはぎを蹴られ悶絶してしまった。
少女に訝られるも苦笑いで誤魔化し更に歩くと、一つの木造建築の前に辿り着いた。
それは見た目からして古く、空気でも淀んでいるのか呼吸もあまりしやすい雰囲気ではない。更には近くにある建物の影響か全体的に陰っており、正直不気味だった。
「狭い部屋ですがどうぞ」
扉を開かれ先へ言われるがまま中へ入ると、彼女に言う通り狭かった。扉一枚挟んだ先、六畳あるかどうかの部屋にキッチンから寝室までセットになった、ある種合理的な空間が広がっている。
「へ、へぇ、個性的な部屋だね」
女性関連がからっきしな十樹はその発言が精一杯だった。これ以上何か感想を言え

と言われても困るほどに。
　だというのに女神はお構いなしに口にする。
「何この物置は。私にこんなところを利用しろとでも」
「す、すみません。何分私の稼ぎが少ないものでして、この家を買うのが精一杯でした……」
「い、いやいい部屋だと思うよ俺は。えーっと」
「自己紹介がまだでしたね。私の名前はシモーヌ。シモーヌ・バレーヌです。よかったらシモーヌとお呼びください」
「俺は志島十樹。気軽に十樹と呼んでくれ。んでこれは自称女神」
「ぶっ飛ばすわよ」
　口ではそのようなことを言っているが既に頬を叩かれており、理不尽なことこの上ない。
「自業自得よ。私はイヴ。女神イヴ。まぁとある星を管理する神ね」
「あぁやっぱりそうだったんですね」
「やっぱり？　シモーヌは神のこと詳しいのか？」
　能闘士（マギア）のこともそうだが、どうやら自分が知らないことを幾つも把握しているようだ。

「はい。十樹さんは異世界から来られたんですよね」
「そこまで知っているのか」
「それはそうでしょ。この世界は異世界の人間を集めた場所なんだから」
「なんだそれ。つまり俺以外にもいるのか?」
　おかしい。イヴは最初に異世界の知識を地球で広めていたと言っていた。つまり大筋は合っているはずだ。となると大体は少数しか転生ないし移動はしないはずだが、今の言い方では大量に集めたということになってしまう。
「事実よ。ま、この子みたいにこの世界の原住民の方が多いけど」
　どうやらシモーヌはこの世界の住人のようだが、だからといって納得はできなかった。
　何故なら転生者が多いならば自分は意外性を持って接してもらえなくなるからだ。
「はいはい馬鹿はほっといて、シモーヌ。内部の構造いじるけど問題ないわね?」
「えっと模様替えでもされるんですか?」
「作り変えるのよ」
　言うが早いか床を踏んづけると視界がたわみだした。
「おい何やったんだイヴ」
「誰が名前を呼んでいいといったのよ。あ、シモーヌは構わないわ」

呑気に言っている間に風景のたわみは消え、その先には別の景色が広がっていた。
「すごい……」
シモーヌは感嘆を漏らしており、悔しいが十樹も同じ気持ちだった。
六畳あるかどうかだった狭い部屋は、今では出入り口の扉以外存在しなかった室内に複数存在し、二階へ続く階段までもあった。
目の錯覚かとも思ったが、シモーヌが確認するように奥へと歩いていくも、ぶつかることなく元々壁があった先まで進んでいった。
「これどういうことだ」
「この建物内を限定にちょいちょいっといじっただけよ」
どうだとドヤ顔で言ってこられるが、こればかりは驚嘆だ。
これまでなんだかんだで馬鹿にしている部分はあったが、いよいよ持って受け入れなければならないらしい。
「やっと納得したかおたんこなす。シモーヌ、あなたにも話したいことがあるから来てもらえる」
十樹への言葉遣いと違って優しい声音で、奥へ行ったシモーヌを呼び寄せる。
奥から表れたシモーヌはおっかなびっくりながらも戻ってき、イブへと視線を合わせる。

「色々勝手にやってごめんなさいね。先言っておくけど元々あった荷物はあなたの部屋にする予定のところへ移してるわ」
「いえ、それはいいんですが、こんなにしていただいて恐縮なんですが、お代はお幾らぐらいになるのでしょうか……」
　どうやら部屋の中が変化したことよりもそちらの方が気になる様子だった。それだけこの手のことに慣れているという証拠でもある。
　イブもそのことを承知しているのか先を続けた。
「安心なさい、お代は結構よ。そのかわりこの家を私たちにも使わせてもらえないかしら?」
「えぇ、それくらいでしたら」
「――――いいの!?」
「あんたは黙ってろっ。話が進まない」
　突然こんなことが起きていきなり家を使わせろと言っているのだから、本来断られるべきところを了承された。驚くのは必然であるはずなのに女神は問答無用でチョップされる。脳天を。
　自分が痛みに耐えている間に二人は情報共有をすませていく。
「あなた服飾が主な仕事のようね。でも仕事は芳しくない」

「はいおっしゃるとおりです。田舎から出てきて頑張ってはいるんですが……最近は特に悪くてお金も少なかったので、先程の三人の方から割のいい仕事があるからどうだと言われたんです」
「で、実際についていったら体を売る仕事で、逃げたしたところをそこの馬鹿に助けてもらったと」
「はい。その説は本当に助かりました。ありがとうございます十樹さん」
一体何年ぶりだろうか、誰かからこうして真正面にお礼を言われたのは。
あまりの感動に思わず余韻を楽しんでしまった。
「じゃあ今もお金に困っているのね」
「はい、お恥ずかしながら当座を凌ぐお金もありません」
「なら能闘士のサポート役をやるというのはどう。因みに月給制でお給金は手取りで金貨三十枚」
「――――き、金貨三十枚!?　よ、よよ、宜しいんですかそのような大金でっ」
「ええ勿論よ。ね、十樹」
「まぁいいんじゃないか?」
嬉しさの余韻が残っており、思わず即答してしまった。金貨三十枚がどれほどの金額かも把握せずに。

「これで交渉成立。これからもよろしく、シモーヌ」
「はい、宜しくおねがいしますイヴ様、十樹さん」
笑顔と感謝の言葉。おまけとばかりに両手で握手され、思わず頬が緩む。
こんな可愛い子に言われてニヤけるなというのが無理な話。
早速気合が入ったのか、シモーヌは両手をきゅっとしめてからキッチンの方へを向かうのを尻目に、十樹は握られた手を目線まで上げる。
「うっわキッモ」
「うるさい今の俺は極めて機嫌がいいんだから邪魔するな」
邪険に扱うも、イヴはふふんと不敵に笑みを浮かべており、奇妙さから後退る。
「な、なんだよ」
「あんた金貨三十枚がどれだけの金額か知ってる?」
「知るわけないだろ。お前が何も教えずに連れてきたんだから。それに約束したのはお前だろ」
「残念だけど雇用主はあんたよ。だからあんたがあの子の給料を払うの」
なんでまたとこいつはこうも傍若無人なのかと問い詰めたいが、その程度で変わったら苦労しないかと、シモーヌの手の柔らかさを思い出し気持ちを落ちつける。が、それは即座に消えてなくなった。

「因みに金貨三十枚だけど、日本円で言うとこれ三十万ね」
「……は？」
「だから三十万。物価もおおよそ変わらない」
「……でゅーゆーあんだすたん？」
「それを稼いであの子に払うのがあんたの仕事。スプーン一杯分の脳みそで理解できたかしら」
イヴの暴言など最早どうでも良かった。
あるのは唯一つ、
「ふっざけんなあああああああああああああああああああああああああああああああああ」
ふざけた雇用契約をしたイヴの行動に対してだった。
「あらじゃああの子が体を売るようなことをあんたは見過ごすわけ？」
「あ、ぅ、それ、は」
烈火の如き怒りはその一言で一瞬にして鎮火する。あんな可愛い子がそのようなことをしている姿など想像もできないししたくもなかったから。
「初めてあった相手に股ぐらを見せるようなことをあの子にやらせるんだ」
「い、や別にそこまでは……」
「最悪咥えさせられたりなんかもするでしょうねおおこわ。それなのにあんたは知らん

ぷりで放置するわけか。あの子が可哀想ね、信じた相手に裏切られて」
「あーもーわかったよ。やればいいんだろやれば!」
「はい言質いただきました。これにて完璧なまでに契約は完了。女神の力で呪いもかけたから失敗したら死ぬから。まぁ私は死なれても困らないけど」
これが神の所業なのだろうか。
やってること悪魔じゃないかと言ってやりたかったが、自分が了承したのも事実。
致し方無いと十樹は今後のことを考えるのだった。

第一章二幕　初めての時止め

翌日、まずは今自分がどういう状況なのかを確認するべく、ダイニングキッチンとなった場所へ皆を集めた。

朝食後でもよかったのだが、食後はゆっくりしたいかとも思い見送り、程よく時間が過ぎたのを見計らって声をかけたのだが、

「あんた何様のつもり。神である私を呼ぶなんて」

「ま、まぁまぁイヴ様。十樹さんの話を聞いてからでも遅くないと思いますよ」

開口一番がイヴの愚痴から始まっており、前途多難な気配を盛大に醸し出しながらも始まった。

「で、何が聞きたいの」

「色々だよ。お前なんも教えてくれてないだろ」

「それくらい察しなさいよ」

「どうやってだよ！」

「まぁまぁ十樹さんも落ち着いて。よろしければ私がわかる範囲でお教えいたしますが」

「その必要はないわ」
　一人面倒くさそうに頬杖をついていたイヴは空いた手で指パッチンをすると、途端に脳内へ情報が重りのように追加された。
　頭を押さえはするもテーブルに寄りかからないといけないほど情報の重さを感じ取り、無駄と思いながらもイヴを睨みつけたが涼しい顔で流された。
「大丈夫ですか十樹さん」
　シモーヌは慌ててそばに寄ってきて支えてくれ、心配そうに顔を覗き込んでくる辺り、どっちが女神なのかわからないほど優しかった。
「急に情報が増えたことで脳が混乱してるだけだから安心しなさい。もっとも、辛いのはわざとだけど」
　ニヤニヤと笑っていらたり、本当にこいつはサディストだとつくづく思う。
「では体に心配は？」
「ないわ。そもそも転生者。能闘士（マギア）は一度不慮の事故で死んだものを指すのだけど、これらは当初予定していた運命とは違うポイントで死んだ時に与えられる権限なのよ。だから二度目くらいは死ににくいように創られてるの。昨日あなたを助けるためにこいつを上空から落っことしたのに平気なのはそのせい」
「まぁ多少は女神の加護があるからだけど」などと言っているが、どこまで真実かなどわ

かりはしない。
ただ言われて脳内に同じ情報がある以上嘘ではないのだろう。
落下に対して言いたいことがないわけではないがシモーヌを助けるためだったということで、初耳ではあっても彼女をためならばと水に流すことにしつつ、他にも何がとあるのかと考えようとしてみる。が、あまり増えているようには感じられず、わかったことは精々昨日聞いた金貨一枚辺りが、日本円の一万円札と同じ金額であることだった。それ以外は銅貨は一円。銀貨が百円単位という程度のもの。必要ではあるが慌てて覚えなくてはならないかと言われるとそうでもなかった。
「おいイヴ」
「あっ？」
聞きたいことがあって尋ねたのに何故こいつは喧嘩腰なのだろうか。確かに自分の聞き方も悪いとは思うが、女神らしさが力以外ないのはどういうことだ。
「これだから童貞は。あんたのそれは女神じゃなくてただの奴隷。自分の都合を相手に押し付けるなっての」
「ま、まぁまぁ」
「ちっ、で何」
本当にシモーヌがいてくれてよかったとつくづく思う。

「情報くれたのは確かに助かるけど、この世界のこと殆どわからないんだが」
「……はぁ、仕方ないでしょ。神が決めたことなんだから」
「どういうことだ？」
　それはシモーヌも知らなかったのか、席に戻りながらも気にしているようだった。
「早い話、ここを作ったのは私以外の別の神。それもとびっきりのね」
「神にもランクとかあるのか？」
「そりゃあるわ。でなきゃ人間の個体ごとに差が出るわけないでしょ」
　ふぅんとは思いはするがピンとはこない。どうやらその辺りの情報は貰っていないようだ。
「神関連は不要ってことで力でやれないようにできてるのよ」
「へぇ。で、お前はどれくらいのランクなんだ？」
　興味本位半分、これで低かったら馬鹿にしてやろう半分で聞いていた。
　しかしイヴは面倒くさそうに話していた表情から一変、口角を釣り上げ、策にまんまをハマってしまった者を見るように視線を向けてくる。
「お生憎様。悪いけど私の神格は上から数えたほうが圧倒的なまでに早いのよ。どっかの誰かさんとは違ってね」
　見事なまでの憎たらしい笑みで見下してきていた。

自信たっぷりだが虚言ではと疑いたいものの、そもそも神の力の優劣など説明されてもわからない。その上実際に色々体験してきただけに説得力も十分と言えた。
「へぇ、イヴ様はおすごいんですね」
「ええそうよ。シモーヌは素直でいい子ね」
頭をなでている二人だけは和やかだが、十樹は一人負けた気分でいた。通っていた学校では上位ではあったが所詮一つの学校内の成績。全国模試では良いときで中堅だった。
どう見返してやろうかと模索はするも容易に思いつくはずもなく、「そんなことより」とイヴに切り出された。
「あんたにはもう情報を与えたからこれで該当するものを見聞きすれば大体は直ぐに把握できるようになってる。後はギルドに行くことね」
「ギルドって組合のことか？」
口にすると自然と脳内で関連ワードが引っ張ってこられた。
各職業別にギルドへ登録し、関連職へつくならば何かあった時に便利だと。ただし入会するにはそれ相応の金額が必要とある。
「ちょっと待て、今の俺にそんな金ないぞ」
「私もちょっとありませんね。参加するには今ですと金貨五十枚も入りますし」

「金貨五十!?」
　とてもではないが出せる気がしなかった。
　そもそもシモーヌの給料である三十枚ですらどうしたらいいのかと頭を抱えたいくらいのに、それ以上の金額など払えるはずもなかった。
「シモーヌ、あなた忘れているようね。能闘士の権利を」
「能闘士の権利？　……あ、そうでした！」
　何か思い当たる節があるのか、脳内検索するよりも先に答えてくれた。
「能闘士ですと国からの補助が約束されていて、ギルドへの参加は無料となっていましたね」
「そういうこと。だから好きなだけ転職もできるし個人窓口にしてもいい。あなた不安だったでしょうけど、能闘士は結構便利なの。金貨三十枚も夢じゃないとは思わない？」
「はい、はい！」
　シモーヌの頭を再びなでており、その優しさを爪の先だけでも自分に別けてもらえないだろうかと十樹は思った。
「で、じゃあそのギルドとやらに行けば良いのか？」
　なんでもないように取り繕ってはいるが、異世界、ギルドとくれば次はモンスター退

治に決まっている。となれば遂に時を止める能力を使う機会がやって来るではないのだろうか。

生憎知識にとしては入っていなかったのか、ワード検索にも引っかからなかったが、全部を網羅していないとイヴが言っていたのだからそういうこともあるだろうと、逸る気持ちを押さえてシモーヌの顔を見る。

「ですね。能闘士は神様とセットでいますので、お二人がギルドへ向かえばそれだけで審査は通るはずです。確か生活に必要な準備金なども支給対象に入っていましたね」

「へぇ、結構いたれりつくせりなんだな……ちょっと待て。わざわざ金なんてもらわなくてもイヴが準備したら良いんじゃないのか？」

仮にも女神なのだ。その程度のことなんて朝飯前のはずだ。

これは名案だと自信を持って言ったことなのだが、目の前で鼻で笑われてしまった。

「神にはできることとできないことがあるって説明、聞いてなかったの、このクズ」

「あーはいはい。その言い方で察したよ。違法だって言いたいんだろ」

「当たり前でしょ。そんな事やってたらこの世界が滅ぶわ。一応やってやれないことはないけど私が殺されるしメリットが全く無い」

「殺される？　誰にだ？」

「はぁ、最高神。因みに似たようなことを私もあんたにできるけど体験したい？」

重い溜息の後に脅してきている辺り、聞く暇があればさっさと動けと言いたいのだろう。

仕方ないと立ち上がり出かけようとして、シモーヌに呼び止められた。

「あの、よかったら服を着替えてみませんか？」

「どっかおかしいか」

確かに昨日この世界に来てからずっとブレザーの制服を着ている。着替えたいのは十樹も同じではあるも、衣服を買うような資金など持ち合わせてはいない。それはシモーヌも同じはずである。

「いえ素敵な衣装だとは思いますが、少々目立ちますので」

「そうね、おまけに臭う。あんたの見た目とそっくりでね」

「お前ほんっとに一言多いよな」

辟易していると、シモーヌは「ちょっと待っていてください」と言い残して自室へと戻っていった。

疑問に思いつつも見送っていると、イヴは「待ってな」というだけで理解しているようだが説明する気はないようだ。

「こちらなんですけど」

戻ってきたかと思うと、手には何か布のようなものを持っていた。

なんだろうかと思っていると体へあてがわれて気付く、衣服であることに。
「え、これ俺のために？」
生まれてこの方女性からのプレゼントなんて母親や親戚筋くらいなもので、他人から貰ったことなんてこれまで一つもなかった。
「はい。差し出がましいとは思いますが、練習で作ったものを軽く仕立て直したものですが、ご迷惑じゃありませんでしたか？」
「全然全然。すっげぇ嬉しいよ！」
「あぁ、良かった」
満面の笑みを向かられてしまい、思わず赤面し惚れそうになる。
いや出会って昨日の今日だ。これで勘違いして告ってでもしたら振られるのが落ち。期待しすぎないよう心がけ、着替えるため二階の部屋へと向かった。
上は白い長袖のシャツと群青色の丈が短いガウン。下は黒いパンツだった。
気温の把握できていないが昨日からそこまで寒くなく、これから動き回る可能性もあり、ガウンの方だけ袖をまくることにした。長袖のシャツは多少ごわついているが不快というほどでもないため、これがシモーヌの香りなのか薄っすらいい匂いもするため、かなり満足していた。
姿見があったので上から下を確認すると、割と悪くないと一人頷く。

「馬子にも衣装ね」
　ご満悦でこれから下へ降りようかと思ったがイヴがまたしても瞬間移動をしたようで、姿見越しにいることを確認できた。壁に背中を預け腕を組んでいる辺り傲岸不遜甚だしい。
「もうちょっとこうプライバシーとかないもんか？」
「言っちゃ何だけど私は私の管轄内の人間なら全て把握してる。あんたの食事の回数もトイレの回数も、一人でいそいそエロ動画観ながらやってたことも」
「だーもーデリカシーがなさすぎるだろ！」
　せっかくの余韻が台無しである。
　なんだって人に自家発電の回数まで把握されなくちゃならないんだ。
「そんなことより重要だからこれだけは言っておくけど、基本能闘士とこの世界は相性が良いようにできてる。それは原住民にとっても。シモーヌがなんであそこまで色々やってくれるかもその辺が影響してのことよ。あんたみたいな転生者に惚れやすくもなってる」
「へ、へぇ。えらいご都合的なんだな」
　十樹としては願ったり叶ったり。イヴとしても都合よく動く可能性もあるしいい事ずくめなのではと思ったが、珍しく真面目な顔でいた。

「ハーレムだとか考えたらあんた死ぬよ。昔いたけど女が惚れやすいのを良いことに発情した馬鹿が」
「どうなったんだ、その男は……」
もうわかっていた。話の流れからそれ以外考えられなかったが、聞かずにはおれなかった。
「やりすぎたことで別の男たちから報復を受けて殺された。しかも言った通りあんたたち転生者は死ににくいようにできているからじわじわとなぶり殺しにね」
「マジ、で？」
「冗談なら警告なんて面倒なことするわけないでしょマヌケ。恋愛は自由だけど何事も限度がある。ま、真実かどうか確かめたければ自分で試すことね」
言うだけ言ってイヴは一人先に降りていく。
喜べば良いのか警戒心バリバリで動けば良いのかわからない。ただ嫌われにくいというのは精神的に楽になるため、意識してポジティブに捉えることとした。
おかしなところがないかシモーヌが最終確認して、オーケーがもらえたことでギルドへ出発することに。
ギルドまでは距離があり、着くまでには憂に三十分はかかるのだとか。それまでシモーヌ、イヴ、自分と三人横一列になって向かった。

その間に少しでも知識を得ようと周囲を見回し、耳を立てていると、日常会話が飛んでくる。

その中でも一番重要だったのは水。治水技術の優れた町ならばもっと気楽だそうだが、この町エルシドではある一定間隔で井戸があるのでそこで汲まなければならないようだ。

調理も薪を使って火をおこしてやるし、風呂なんて滅多に入らず拭くだけで終わることもザラ。トイレなんか決められた場所があり、そこでするのだとか。

大も小も共同で使うのが基本だと知識が流れてき、つくづくイヴがいてくれて助かった。イヴが作り変えた家の中には水道があって蛇口をひねれば水が出る。コンロを使えば火がでてシャワーに風呂も完備。水洗トイレまでついていた。

シモーヌは見たこともない技術に目を輝かせていたが、十樹はそれが当たり前の世界がどれだけ恵まれているかを少しだけ実感する。

「その辺揃えたのは、ないとキレるやつがいるからよ。なまじ記憶があるぶんそこを起因にホームシックになるやつが結構いんの」

「まぁ、気持ちはわかるかな」

十樹とて元の世界を忘れたわけではない。戻れるならば戻りたい気持ちはあるが、こちらの世界を体験してからでも遅くないというのもまた本音である。

「へぇ、以外にキモ座ってるわ。一応はホームシックだとかにならないように私たち神がついているけど、あんたの場合は必要なさそうでラッキーね」
「だったらもうちょっと愛想よくだな」
「あんたがイケメンになったら考えてやるわ」
そこを突っ込まれると痛い。
彼女いない歴が年齢である以上、自分に自信が持てているはずなどないのだ。
「私は十樹さんのこと格好いいと思いますよ」
「シモーヌありがとう。俺の味方はシモーヌだけだ」
あまりの優しさにどっぷりと浸かり甘えてしまいそうになる。蜂蜜のように絡みつく甘さに溺れそうだ。
「け・い・こ・く」
しかし隣にいるイヴに水をさされ、はっとし気持ちを切り替えた。
程なくしてシモーヌが足を止めた先には大きな建物が存在していた。パッと見ただけでも拡張されたシモーヌの家のざっと六倍から七倍はありそうなそれは見事な建物。
入り口の上には看板がかかっており、ギルドと書かれていた。ただし英語を崩したかのような文字のため何故読めたのかは不思議だ。
「あんたの頭、マジで脳みそ入ってなさそうね」

「だからなんでそう喧嘩売るようなことを言うんだ」
　もうなじられ方からして知識の中に入れておいたと言うことなのだろうが、もうちょっと伝え方というものがある。女神なのだからそれくらいはできそうなものなのに。
　でもとふと気づく。わざわざ考えていることに反応していることを。なんだかんだで気にかけてくれているんだなと。
「ちょ、ちょっとそれセクハラよ！」
　図星だったのかこれまで見たこともない赤面顔を晒しており、愉快さよりも戸惑いのほうが強かった。そして不覚にも可愛いとさえ思ってしまったのだ。
「だからそういうのを考えるな！　暫くあんたの心なんて見ないわっ」
　ふんっとそっぽを向いてしまうが、読心をやれだなんてこちらは一言も言っていないのだから自爆もいいところなのだが、今はそっとしておくことに。
「あの～、どうかされました？」
「あぁ気にしないでくれ。こいつが遊んでるだけだから」
「誰が遊んでるってこのトンチキ！」
「ご覧の通り。さ、それよりも中に入ろうぜ。周りにも変な目で見られ始めたし」
　周囲を見回せば奇異の目で見るものばかりだった。あれだけ大きな声で叫んでいれ

ばそれもそうかと納得するしかないため、そそくさと中へ入ることに。
こちらの世界に来た時もそうだが、情緒のへったくれもないものだと内心ため息をつく。
しかし中に入ればその考えも一発で吹き飛んだ。
広いロビー。何平米あるのか思わず聞きたくなるほどの面積の中で人がせわしなく動き回っていた。話し声から怒鳴り声、靴が地面に擦れる音からどっかで演奏でもしているのか楽器の音までも聞こえてきていた。
これほど生気溢れる場所に、自然と血が滾っていくのがわかる。
自分はここから再スタートするのだと体が、心臓が反応していた。
「受付はこっちですね」
先行くシモーヌに案内された先は何人も並ぶカウンターの中の一つ。ギルド総合受付窓口と書かれた場所だった。
「あらシモーヌじゃない、おはよう。遂にギルド入会の資金貯まったの？」
「おはようございますジェイミーさん。今日は別件でやってきました」
シモーヌが横へどくことでジェイミーと呼ばれた女性の顔が見えた。
赤毛のショートヘアーに整った顔立ち。胸は小さいのか膨らみはないようだ。濃紺色の衣服は制服なのだろう、隣の受付の人も同じ格好をしていた。

「こちら受付のジェイミーさんです」
「ジェイミー・ポーターよ、よろしくね」
「俺は志島十樹。こっちは」
「女神イヴよ」
「女神……じゃあ志島さんは能闘士」
「らしい。昨日来たばっかりなんでよくわかってはないけど」
　ジェイミーは十樹とイヴを交互に見てから手元にあったベル振って鳴らし始めた。
　何事かと訝んでいると、別の誰かがすっ飛んでくる。
「ジャイミーさんどうかされました？」
「能闘士の方がお越しになったわ。長への連絡をお願い」
「能闘士が……」
　やってきた男はこちらを一瞥してから「わかりました」と元気よく答えて階段のある方へ走っていった。
「直ぐに戻ってくると思うからちょっと待っててね」
「何かテストでもやるのか？」
　定番と言えば定番だ。この手の時は入会するのにテストをし、合格すれば入れてもらえるというのは転生物に限らず創作物では見かけてきたから。

「ええ、それもあるわ。でもどちらかと言うと顔見せがメインね。っとその前にこれに名前と所属したいギルドを書いてもらえる」
「あ、そういや決めてなかった」
　言われるまで忘れていた。ギルドは職種の数だけあることを。
　モンスター退治とかその手のものがあれば良いのだがと悩んでいると、イヴが横から紙を上に指をトンっとやると文字が滲み出るように浮かび上がる。
「私たちはフリーで行くわ」
「自由枠ですね、畏まりました」
　何勝手に決めているんだと言いたかったが、先に知識が脳内にあふれてくる。自由枠とは個人事業主のようなもので、持ちかけられた仕事をこなすのだとか。仕事の選択は勿論できるが名が売れてなければただの便利屋でしかなく、何ができるかもわからないため、原住民はすることがなく専ら転生者。この世界で言う能闘士でないと登録しないのだそうだ。
「こんなので金稼げるのか？」
「あんた次第よ。私は誰かの下になんてつきたくないの」
「は、はぁ～？　そんな理由で勝手に選んだのか？」
　案があっての行動なのかと思っていたが、どうやらただの我儘のようで頭が痛くなっ

てくる。かといってギルドの検索ワードの中にピンとくるものは直ぐには思い浮かばず、それよりも前に先程走っていった男が戻ってきた。

「おまたせしました。皆さんどうぞこちらへお越しください」

男はハキハキと喋り先導してくれる。

それじゃあとジェイミーに別れの挨拶をし男について行くが、あまりの陽気ぶりに陰気よりな十樹としては相容れなさそうな雰囲気を全身から醸し出していた。

直視できずに目をそらしながら後をついていくと、四階の奥の部屋まで案内されることに。

「こちらの奥で長がお待ちです」

案内はここで終了のようで、男が去っていくのを待ってから観音開きの戸を両方纏めて開いた。勿論理由は一度そうやって開けてみたかったからだ。

中へ入ると二十畳はあろうかというほどの広い部屋があり、奥で一人の男性が腰をかけていた。

「よくきた能闘士よ。私はギルドを総括する長。一部からはギルドマスターなんて呼ばれているものだ」

白髪交じりの老人らしき男はデスク越しに、にこやかに笑みを浮かべていた。

ここにきて急に緊張が走る。バイトの面接の時など比較にならないほどの重圧が、ギ

ルドマスターからは感じられた。
「そういう茶番はいいからさっさと始めなさい」
そんなもの意に介さずイヴは堂々とした出で立ちで言い放つ。
「これはもしかしてかなり力のある神、のようだね」
「あんたの神よりもね」
「これは手厳しい。今ローラは出かけているから残念だけど顔合わせはまた今度」
あぁそういうことかと把握した。
「あんたも俺と同じ転生者なのか」
「君も理解力があるようだね、それはいいことだ。この世界では頼れる者が少ないからとても重要な力だよ」
そう言いながらも立ち上がり近寄ってくる。ただそれだけなのにわかってしまった。この人が何度も戦いの中をくぐり抜けてきたことが。
年を感じさせないしっかりとした歩み。歩幅も歩調も一定で一切ブレを感じさせない。逃げても直ぐに捕まりそうな威圧感。
殴り合いなんて昔にやったっきりで経験なんて殆どない自分でもわかるほどに、気配が重厚だった。
「ではテストを始めようか」

「……何をすれば良いんだ」
「神と対である時点で確定ではあるんだけどね。確認と、後は事件とかあった時に誰がやったかすぐわかるよう能力の把握だな」
　確かにこの世界に来てから全然時を止める能力なんて使っていなかった。使う機会がまったくなかったわけではないが、どうせならここぞという時に使って驚かせたいという子供じみた考えがあってのことだった。だが、ここで使えというのならばお望み通りやってやろうと意を決する。先輩能闘士を驚かせてやりたいというこれまた幼い発想だが、十樹にとっては重要なためやらない理由がない。
　イヴもその気なのか、見れば頬を震わせながらもやってみろと顎をしゃくってくる。
　ならばと右腕を前に出し、自分の中に増えた物を意識する。不思議と使い方なんて習ってもいないのに把握でき、その通りに動かす。
　内側にある力の塊のようなものを取り出すようにしてから、僅かな躊躇いを胸にいざ使ってみた。最強である時を止める能力を。
「って、あ、れ？」
　使ったはずだ。時を止めたはずだ。だというのに膝は崩れ落ち、止まっているはずのシモーヌは慌てて支えてくれた。
「十樹さん、どうされたんですか十樹さん！」

心配そうに抱きかかえてくれるシモーヌには悪いが胸の感触が心地よいと感じるとともに、体に力は入らず起き上がれそうもなかった。

視界にイヴとギルドマスターが映るが、方や驚いており、方やこれまで見たことない。いや、一度だけ見た顔で笑っていた。そう、あの顔は能力を宣言した時に見た顔。

その意味を悟るよりも先に十樹の意識は暗い中へと落ちるのだった。

第一章三幕　時を止める能力は最弱だった?

いつの間にか意識を失っていたのか、ゆっくりと目を開ける。体に怠さがあり、起き上がれないことから瞼だけを開いてボーッとする頭のまま考え事した。

なんだかひどい夢を見ていた。

自分が死んで異世界へ行き、テストのようなものをしたところで内容は途切れていた。

性格の悪い女神と、とても優しい女の子に挟まれて過ごした二日間。だった気がする。

せっかく能力を貰って使う体験までできたら最高だったのだが、その前に気を失ったのはなんともったいないことかと少しばかり後悔する。夢の話なのに。

そろそろ学校に行かなきゃとふらつく頭を抱えて起き上がろうと手を付き、異変に気づく。

体に力が入らないのだ。

手をついたはずの腕は体重を支える前に折れ、うつ伏せの状態で枕へ倒れ込んだ。

「なに、が……?」

起きたのだと思うも、それを知るだけの脳が機能をしてくれていない。
部屋の外で誰かが走っている音が聞こえてくると、やや間を空けてからノックが二度され、こちらの返事も待たずに静かに戸を開く。
「十樹さん気付かれたんですね」
なんとか首だけを回して見えたのは、安堵したシモーヌの顔だった。
――あぁ、夢じゃないんだな……。
母親だろうかという期待からの消失感と、自分はファンタジーの世界に入れているのだという一種の満足感に襲われ、苦笑いを浮かべる。
「まだ起き上がれそうにありませんか?」
「悪い、ちょっと仰向けになるの手伝ってくれ」
うつ伏せから変えたいのだが、生憎とそれをやる力も残っていないようで、恥ずかしながらシモーヌに頼む。
彼女は嫌がることなく、「ここ、引っ張ってもいいですか?」と聞いてきながらも反転させてくれた。
「ありがとう。助かったよ」
「いえ、私もお役に立ててよかったです。イヴ様が十樹さんが起きたとおっしゃられたので来て正解でした」

――あぁ、そういうことか。

どうして走ってきていたのかも、ちょうどいいタイミングで表れたのかも納得した。

「俺に何があったんだ?」

「簡単よ。あんたは能力の使いすぎでぶっ倒れたというただそれだけの話し」

「イヴか」

人にお構いなしに一瞬でシモーヌの隣に立ったのは女神イヴ。この世界に自分を連れてきて、尚且能力をくれた張本人なのだが、解せない発言に思わず起き上がろうとする。

しかし体は言うことを聞いてくれず駄目だった。が、シモーヌが背中を支えてくれたおかげで上半身だけは起き上がることに成功した。

「ありがとうシモーヌ……で、どういうことだ。俺はギルドで能力を使用したってことで間違いないのか」

「それは間違いない。私はしっかり把握していたし、なんなら何が起きていたか、私視点であんたに見せてあげることもできるけど」

「なら見せてくれ」

食い気味に言うと初めから分かっていたのか、一言も言い返さず指を弾いた。

途端脳内に映像が流れてきた。今リアルタイムで見ているかのような錯覚さえしそ

うなほど鮮明な映像が。

そこには腕を上げたばかりの自分の姿があり、確かにそこから自分は能力を使用したのだと働き始めた脳が思い出してくれる。

自分の能力は時を止める能力。

つまり止めた時間内で自在に動けるようになる。はずなのだが、映像の中の自分は一向に動く気配はない。

どういうことだと観察していると、確かにシモーヌもギルドマスターも止まっており、恐らくは時を止める能力は使われているはずだ。視界の主であるイヴは確認するように窓へ向かい外を眺めると、下の広場では同じように静止した世界が広がっていた。人が何秒経っても動かないのだ。空中に視線が動けば飛ぶ鳥がその姿勢のまま羽ばたきも滑空も、落下さえしていない。

正真正銘の時が止まった世界である。

どういうことだと思っていると、イヴが移動したのか静止している自分の前までやってきて呟いた。

「これでわかった？　あんたは時間さえ止めたら最強だなんて勘違いしてるけどざーんねん。止めたところで自分が自覚してなきゃ動くことなんてできない。そもそも時なんて止めなくても時間の流れを感じられたら誰でも同じことが再現できる。時を止め

るなんて能力が無くても使用できるっていうのに、せっかく何でも能力を上げられた絶好の機会を、こんな無駄に使用するやつなんてこれまでいなかったんじゃないかしら。あーっはっはっはっはっはっはっは」

最後には人を馬鹿にするように盛大な高笑いを上げており、元いた位置へ戻ると止まっていた時間は動き出し、自分は膝をついていた。

――何で俺は気付かなかったんだ。イヴは最初っからこれを待っていたんだ。だから止めなかったしあれだけ笑っていた。なのに俺は一人舞い上がってっ。

ふつふつと湧き上がる怒りと後悔が身を焦がしそうになる。

「イヴ、お前っ」

怒気を含んで呼びかけたが、話を逸らすようにイヴはシモーヌへと語りかけた。

「シモーヌ。確かあなたこいつのためにスープを作ってたわね。悪いけど温め直して持ってきてもらえる」

「そうでした。せっかく起きられましたし、少しでも胃に何か入れておいたほうが治りも早くなるかも知れませんね」

優しい彼女だけあって、背中にクッションを敷いてくれて一人でも起き上がれるように調整し、部屋から出ていった。

「どういうことだ。なんで何も言ってくれなかったんだよ!」

「言ってもあんたに伝わらないからよ。想像できた？　自分なら大丈夫だとか思ったりしなかった？　そうなるってわかったからあえてそのままにしたのよ」
「だからって他に方法があるだろ」
「ないわ」
きっぱりと言い切られた。
イヴはなんだかんだで放り投げずに面倒を見てくれているものだと思っていた。だというのに今はここにきて突き飛ばされてしまった。元いた世界の最後の記憶にある駅のホームの時のように。
「せっかく能力が手に入ったのに使わないの？」
だというのに。これほどまでに打ちのめされているのにまだ飽きたらないのか、追い打ちをかけ煽ってくる。
腕に力がこもる。
布団を握りしめ、歯ぎしりまでもして、思いっきりイヴを睨みつけた。
「いるかよこんな能力！　全く役に立たないじゃねーか！」
恫喝するように叫び声を上げる。
シモーヌが心配してやって来るかもしれないなんて気遣いをする余裕もなく、ただ叫んだ。

あまりに興奮しすぎていたのか肩で息をし、粗い呼吸を繰り返す。
「今、なんて言いた」
「あぁ?」
冷たい目でイヴが睨んでくるが、今の十樹には無駄だった。怒りが強すぎてその程度では怯むこともなく真っ向から受け止めて言い返せる。
「なんて言ったのかって聞いてるの」
「だったらもう一回言ってやる。時を止める能力なんて何の役にも立たない糞みたいな能力だ!」
力の限りに叫ぶ。
ここまで来ると怒りを通り越して拒絶にまでなっていた。
でもそれだけ十樹は期待していたのだ。楽しみにしていたのだ。能力を使っての生活を。これまで味わったことのない楽しみに夢を抱いていたっていうのに、これはあんまりだ。
自然と目元には涙が溢れ、布団を濡らしていく。
――悔しい。なんだってこんな……。
自分にだって落ち度はあるのかも知れない。それでもと再度強く睨みつけ、異変に気付く。

「えぇぇぇ、その言葉を待ってたわ十樹」

初めて名前を呼ばれた気がした。

しかもイヴは冷たい目線でもなく、厭味ったらしい笑顔ではなく、純粋に嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「どういう、ことだ？」

「能力を授けるのには幾つか特例があるのよ。あんたは今それを満たした。つまり」

「つまり……っ」

急な態度の変貌っぷりに毒気が抜けたのか、思わず喉が鳴る。

おかしい。さっきまであった怒りや後悔なんて既に消え失せ、心臓は早鐘を打っていた。これから何かが起こることを期待して。

「これから特例でもう一つの能力を授ける」

「もう、一つ？」

「えぇもう一つ。この場合最低限条件があって、神側は必ず一つ前の能力と合う物を選ばなければならないという成約がある。だからあんたは選ぶことはできないけど一つ目の能力も死ぬことはないってことよ」

「なんでそんなものが？」

混乱する。

あまりに唐突すぎて頭が追いつかない。
だがイヴはこれまでが嘘のようにちゃんと説明をしてくれた。
「転生者が選んだ能力が、実は使えない能力だなんてことはたまにあるのよ。事象を知らずに選ぶことになるから当然といえば当然だけど。それの救済措置としてあるのがこの特例。使用者が心から使えないと思い、神側もそれを認めた場合特別にもう一つ授けられるってこと。あんたは今それを満たしたわけ」
「じ、じゃあ、俺は能力が」
「今から使えるものを授けるわ。喜びなさい、これは正真正銘とんでもない能力だから」
胸に触れなくても鼓動の音が聞こえてくる。
イヴにはとうにバレているだろうが、それでもと平静を取り繕うも、お構いなしにイヴは近寄り人差し指で額に触れた。
「あんたに上げるもう一つの能力は、時を動かす能力よ」
瞬間、内側に何かが入ってくる感覚に襲われる。
これは前にもあった能力が入ってくる感じだ。
胸の中に確かにあるその温もりは、冷めていた気持ちをこれでもかと体を温めてくれた。
「おまたせしました。十樹さん、これを飲んで英気を養ってください」

丁度いいタイミングでシモーヌがやってきて、近くの小さなテーブルにお盆を置く。
「シモーヌには世話になりっぱなしだな」
泣いていたことを誤魔化すように笑顔を見せていると、シモーヌはお盆の上にあった皿とスプーンを手にし、スープをすくってきた。終いには息を吹きかけ冷ましてからスプーンを突き出してくる。
「はい十樹さん、口を開けてください」
――え、これってひょっとすると、リア充御用達のイベント。あーんではなかろうか!?
ただでさえ先程色々起きたのに、更に追加でこのような最高に美味しいイベントが起きるとは想定外だった。
「あ、あーん」
とはいえ目の前でやってくれているのだから邪険に扱う理由はないし、やるつもりもない。ここはご厚意に甘えるのが相手へのためでもあると言い訳を並べて一口頂いた。
「どうですか?」
「ん、めっちゃ美味しい！　何これ今朝食べたのよりずっと味がはっきりしてる」
「朝にお出ししたのはまだお金が入る前だったので具材が少なめでしたが、今は色々食材を買い足せましたので、ちょっと豪勢にしちゃいました」

小さく舌を見せてくるその姿は最早反則であった。
ただでさえシモーヌは可愛い見た目をしているのにそのような茶目っ気ある仕草など、相乗効果で皆を魅了すること間違いなし。下手すればそれだけで一国を手に入れられるのではなかろうかというほどの破壊力だった。
おまけにまたあーんをやってくれるのか、スプーンに乗ったスープへ息をかけ始めたところで、
「こいつにはこれで十分よ」
パチンと音が鳴ったかと思うと熱い液体が唐突に口の中に一杯になったかと思うと、嚥下もしていないのに喉の奥へと消えていき、先へ進めば進むほど熱さが広がっていった。
「アツ、いた、やっぱアツ」
痛いのか熱いのか判断がつかない体の訴えに、ベッドの上をのたうち回ることしかできなかった。
「ふん、だらしない顔がこれで少しはマシになるんじゃない」
「ひ、ひふ、ほはぇ!」
口も喉も食道に胃さえもやけどをしたような感覚に襲われ、反論しようとするも言葉が上手く出てくれない。

「心配しなくても火傷なんてしてないわよ」
言うだけ言い残し、さっさと部屋から出ていった。
二人取り残された十樹とシモーヌ。
十樹はイヴの唐突な行いに、せっかく見直した心が何処かへ行きかけた。
「イヴ様にちょっと悪いことをしましたね」
しかしわかっていないのは自分だけなのか、イヴの行いに何か心当たりがあるようで、シモーヌが小さく微笑んでいる。
「ちょっとイヴ様のご様子を見てきます」
十樹には何がなんだかわからず、聞こうとしたところでシモーヌも空いたままになっていた戸から出ていってしまった。
一人取り残された十樹は、
「なんなんだ、一体……」
わけも分からず、ぼやくことしかできなかった。

第二章一幕　始まりはいつも突然に

「で、そろそろ仕事をしたいと思うんだ」
夕食後。もう体の怠さはすっかり治っており、空腹も凄かったことからいつもの倍は食べてから切り出した。
「です、ね。私もサポート役としてお仕事まだやれていませんし」
「あら、シモーヌはもうできているじゃない。家事を全部やってくれているんだから」
イヴの言う通り、家事全般全てシモーヌ一人がやっている。自分がやろうかと言っても頑なに拒む影響で手伝えていないのも、仕事を求める一つの理由でもあった。
「シモーヌは何か知らないか？　早くて割の良い仕事は。モンスター退治とか」
他にも理由を上げるならシモーヌの給料を稼がなければというものと、自分の能力を使って一旗揚げたいという欲求である。
イヴには考えが筒抜けなのか、あからさまにため息をついていた。しかも、
「モンスター？」
シモーヌも小首を傾げている。
実に可愛い仕草だが、今はそれを気にしていては話が進まないと邪念を取り払う。

「いないかな？　こう人里を襲うーとか通行の邪魔になるー的なの」
「モンスターー……あぁ魔物ですね。最近の魔物は大人しいのであまりその手の仕事は募集されませんね」
「へ、ないの？」
　異世界に来たなら標準的な依頼であるはずなのに、それがない？
　どういうことだとイヴを見れば、もう一度ため息を吐いてから答えてくれた。
「先に言っておくけど魔王を倒すとかないから。それならあんたが今日会った鵝毛玄次（がもうげんじ）。あぁギルドマスターだけど、あいつが数十年も昔に終わらせちゃってるわよ」
「あの爺さんそんなに強いのか!?」
「言っちゃ何だけどこの世界において最強格よ。神も私と同等レベルね。まぁそれは置いといて、魔王を始末した以降、魔物は滅多に人里なんて襲わないのよ」
「は？　じゃあどうするんだよ。というか能力の意味ってなんだ？」
　それでは宝の持ち腐れなのではなかろうか。
　確かに全てが全て戦いの能力を欲する人間だけではないだろうが、持っているものは多いはずだ。異世界物を当たり前のように受け入れていればいるほどその比率は高くなるはず。それは神ならば尚更把握しているのにどうして。

確かにモンスターの情報がなかったのはこれでわかったが、結局疑問は残る。わざわざ一つ能力を分け与えられているのにどうしてだと。

「能闘士（マギア）の意味、あんた考えたことある？」

言われてみれば考えてなどいなかった。てっきり転生したものを分けるための名称なのだとばかり思っていただけに。

――え～っと何々。能闘士は転生者を識別させやすいための名称、か。

なんだあってるじゃないかと思った直後にやってきた情報に思わず声が出てしまった。

「はぁ、なんだこれ」

「どうかされたのですか？」

「いや、えぇ～。これマジなのか」

「良いから口にする。シモーヌも困ってるでしょうが」

簡単に言ってくれるがどう口にしたらいいのかわからない。いやそのまま口にすればいいのはわかってはいるが、少々躊躇われた。認めてしまうようで。

どうしようとシモーヌを見れば純粋な好奇心で見られ、イヴを見ればガンを飛ばしてきていた。さっさとしろと。

仕方ないと意を決して口にする。

「能闘士は能闘士同士一対一で戦いを行う。これを能闘士の集い（サバト）という。能闘士の集い（サバト）への神の介入は厳罰に処す。総当たり戦で勝利回数が多いほど報奨金が貰える額が上昇する。拒否する場合は予め神に伝え、辞退することで回避できる。相手はランダムで決められるため、相手を把握することは神でも難しい、だと」

全部口にしたことで満足したのか、イヴはにんまりと笑みを浮かべていた。

「なんかおかしいとは思ってたけど、イヴお前、これ狙ってたんだろ」

「当然でしょ。総当たり戦なんて言ってるけど結構ブロック別で行うから大して勝たなくてもそこそこ勝てば報酬は得る。まぁ全勝すれば金貨百はくだらないけど、あんたにそこまで求めてないわ」

「自慢じゃないが喧嘩不慣れだぞ、俺。後金作ったら経済が壊れるとかどうとか言ってたのにこれはいいのか？」

「あんたが雑魚なのは知ってるわよ。おまけに金は作ってない。これはこの世界の人間が落としていってるだけ。あんたスポーツとか格闘技の試合、生で見に行ったりしない？」

あぁそういうことかと得心がいった。

つまり入場料を使って報酬が払われるのだと。

「なるほど、能闘士の戦いとはそのようなものだったのですね」

だというのに原住民であるシモーヌが感心しており、どういうことだとイヴへ目配せをする。
「あんたも理解した通り見るためには金が必要なの。いい席はそれ相応に必要だし、見えにくいところなら銀貨三十ってところかしら。いつも生活苦だったこの子は知っているだけで体験はできなかったのよ」
「でも今は俺のサポート役としているから一緒に行くこともできると」
追加でやってきた知識をそのまま口にすると、イヴは満足そうに頷く。
当人であるシモーヌはというと、自分とイヴを交互に見ており、理解していない様子だった。
「シモーヌはこれから毎回特等席で能闘士の戦いが見れるっていうことよ。誰かさんが逃げなければね」
「宜しいんですか？　私お金なんて」
「必要ないわ。寧ろこっちが払う必要があるほどだし」
イヴの言葉にシモーヌの頬は上気し、両手を握りしめて喜んでいた。これまで見たかったけれど見れなかったのだと、彼女の反応がそれを示していた。
それを見届けてからイヴは流し目を送ってきており、本当に性格が悪いと言う他なかった。こんな状況で断れる男なんて一体誰がいるというのだ。

「了承オーケー了解。誘いに乗るよ」
「誘い？　違うわね。あんたは私とシモーヌに誘惑されただけよ」
「言ってろ」
　呆れてシモーヌに入れてもらっていた紅茶を口に含む。やや渋みはあるが飲みやすく、香りもいいため頭の中がスッキリするようだ。
　そこでふと思い出す。聞きたかったことが他にもあることを。
「で、戦いっていつからあるんだ？」
　当然いつ、どこで行われるかわからなければ戦いようがないし準備する時間も欲しい。能力もまだ試せていないのだから。
　イヴによると能力は生命力の一部を削り取って使用するため、限界まで使い切ってしまうと気絶するらしく、起きても直ぐには動けないのだそうだ。ギルドで自分が倒れたのはそれが原因だとか。
　自分が時間を止めている事実を知覚できないから能力を停止させることもできず、生命力がすっからかんになるまで使い切ってしまう。それを回避するのが時を動かす能力なのだそうだが、まだ試せていないためどうなるかはわからない。
　生命力がやっと戻ってきたところというのもあるし、また失敗したらという不安もある。

情けないとは思うが、取り敢えず試す精神があればそもそもギルドに行く前に使用しているため、陰気な性格は異世界に来てもそうすぐ変わらないようだ。
「本当に参加するってことでいいわけ」
「さっきも言ったろ、言ったからにはやる。で、いつなんだ」
これは半分意地だ。もう半分はシモーヌに格好いいところを見せたいという下心だが、逃げずにやろうとしているだけ自分を褒めてやりたい。
イヴには筒抜けなのかも知れないがそれでもと虚勢を張ってみると、満足そうに頷いてこう言った。
「今から」
「は？」
間の抜けた声をだし、カップをテーブルに置いた瞬間視界が入れ替わった。
いつぞやにも体験した瞬間移動が、再びと十樹を別の場所へと送ってきたのだった。

第二章二幕　能闘士の集い（サバト）

「おいおいおいおいおい。これはどういうことだよイヴ」

周囲を見回すと何処かの町の通りなのか、建物と人によって囲まれていた。

もう日が落ちてやや時間が経過しており、電灯の概念がないこの世界では松明や蝋燭で明かりを確保するしかない。だというのに集まった人々は明かりも持たずに歓声を上げているだけだった。

「これが能闘士の戦いのステージよ。あんたには夜らしく暗い状態で見えるけど、観客側はこの中でもハッキリ視認できるようにできてるから存分にやればいい」

「いやそうじゃなくて。あーいやそうだけどそもそもなんで戦いの知識をくれてないんだよ」

「勿論わざとに決まっているじゃない」

「こんっのくそ女神っ」

能力を一つ追加してくれたことで十樹としてもイヴとは友好的に過ごしたいと考えていたのだが、どうやらそれはこちらだけだったようだ。

「因みにだけど家の中から見ている組は一番高い金を払った組よ。用意された家の中か

ら観戦できるビップ席。あそこの人間に気に入られるとこの先生きるのに困らないくらいには頼られるようになるわ。次は路上の先頭。あそこもボチボチだから良いところ見せると後で見返りがあるかも。その後ろは何とか見ていけている層だからあんまり気にしなくていいわ」

おまけに見当違いなことを説明してくれ、大変ありがたくなかった。

長期的に見たら重要な情報かもしれないが、今必要なのはそんなことではないのだ。

そんなことお構いなしにトントン拍子に話が進んでいく。十樹にとって都合が悪い方へ。

「ヒャッハー！　お前が今回の対戦相手か？　俺の名前はフレイムタン！　名前の通り炎使いだ！　燃えているかいベイビー」

「で、あれが今回の対戦相手（バカ）ね」

「こっちは今胃もたれしそうなのにこってりしたもん持ってくるなよ……」

イヴが指差した先にはパーカーにヘッドホンをつけた男が、ダンスを踊りながら立っていた。ただどうも動きがぎこちなく素人感が拭えない。もっと言えば無理にやっている気さえした。

「あんたの日頃の行いね」

「あぁそうかい。なら俺はそんな運命を強いる神様を恨むね」

半眼でイブを睨みつけるも、涼しい顔で流される。
「あら、それはなんて美しい女神なのでしょうね」
嘯いている辺り本当に肝っ玉が座っていると言わざるを得ない。神だからかも知れないが。
「お前の名前はなんて言うんだいメーン？」
「俺か？　俺は志島十樹だ。こっちは女神イヴ」
「ふん、実にナンセンスな名前だ。せっかく生まれ変わったんだからもっと熱い名前に変えようぜ」
「あんた自分の名前変えたのか？」
というか変えられるなんて知らなかった。特別自分の名前が嫌いだとか思ったこともないため、変える理由など十樹にはこれっぽっちもないのだが、フレイムタンとやらはあったようで、ちょっぴり気になった。
「ああそうだぜ。でももう過去の名前は前の世界に置いてきた。だから俺の名前はフレイムタン。もしくはフレイムと呼んでくれ」
「あいつの本名は鈴木晶（すずきあきら）。元いた世界ではハブられていたようね。それが転生する折に弾けた感じ」
「本名は結構普通なんだな」

フレイムタンとやらのインパクトに気圧されたせいか、名前がその辺にいそうな名前だけについ口が滑った。
「普通っていうな！」
「うおびっくりした」
唐突に叫んできた鈴木に思わず驚いてしまった。
「まぁまぁフレイム落ち着きなよ」
遅れて表れたのは鈴木の神だろうか。
――性別が違うだけでイヴと同じ神、でいいんだよ、な？
正直自信がまるでなかった。
髪は金色なのだが、暗い中でも分かる程度には根本が黒い辺り地毛は黒髪なのだろう。上着はレザージャケットを羽織、下は同じくレザーのパンツというパンクな感じに決めていた。
「なぁイヴ」
「その先言ったら殺すわよ」
ドスの利いた声だけに、一緒の扱いをするなと言うことだろう。
同じ神なのにここまで差があるものなのかと素直に感心した。
「へいへいお前ら調子に乗ってんじゃねーぜ」

「俺とサイスにかかれば全勝、必勝。これから先も常勝」
　これはヒップホップというやつなのだろうか？　知識がないため上手い下手の判別もできず、どう反応するのが正解なのだろうか真剣に悩む。
　イヴに視線を向けても辟易したような表情をしており、お膳立てはしたものの本当に相手のことはわからなかったようだ。一緒に飛ばされていたシモーヌも困惑しているのかずっと無言で見ている。
　十樹としてはできれば関わりたくないタイプの人間だが、ここは口を開かなければ先に進まないのだろうと、重い溜息を吐き出してから話しかけた。
「これからお前と舌戦するつもりはないし、さっさと勝負とやらを初めないか」
「お前と舌戦、お前は善戦。俺とお前は対戦」
「いやお前のつまんない話はいいから」
「つまらないとか言うな！」
「おぉ、またかよ」
　どうやら新しくつけた名前通り沸点が低いのか、一瞬で怒り出していた。
　――そういやこの場合どう言うんだろうな？　改名ならぬ戒名なのか？
　鈴木に毒されたのか、しょうもないことを考えてしまう。
　このままでは自分も痛い奴の仲間入りをしそうな気がし、首を振って切り替えた。

「鈴木、こっちはさっさとた」
「――――だから俺の名前はフレイムタンだ！」
「フレイム、これがあいつらの策略なのさ。あそこにいる神はこの手のことを好んでするようなやつだしね」
「そ、そうか。なら気を取り直して」
　そう言ってまた始まるのかとうんざりしかけたところでイヴが割り込んできた。
「あんたサイスって言ったわね。どうやら私のことを知ってるようだけど、ひょっとしてストーカー？」
「馬鹿言うな。お前の悪名を聞いたことがあるだけだ」
「へぇ、どんな」
　イヴは愉快そうに笑みを浮かべて問う。
　この女神の性格を多少知ったことで、この先に何が起こるのか想像がつくだけに、相手の神であるサイスには思わず両手で拝みたくなった。
「自堕落女神。簒奪女神。紐女神。詐欺師女神。後はサディスト女がむぃっ」
「丁寧な説明をありがとう」
　先を続けようとしていたサイスだが、途端に口を縦にしたまま宙へ浮いていた。まるで誰かに頬を捕まれ持ち上げられているように。

「ほらもっと鳴いてもいいのよ？　私はそれでも楽しめるから」
「サイス！　おいあんた。うちのサイスに何やってくれてんだ。そもそも神は戦いへの参入は禁止されているだろ！」
「黙れ囀ることしかできない雑草風情が。これは神同士のいざこざでお前には関係ない」
冷たい目線で睨みつけられたからか、一瞬怯んだ鈴木だが、歯を食いしばって前に足を踏み出した。
「こいつは俺の魂の兄弟だ！　誰であっても傷つけるやつは許さねぇ」
懸命に守ろうとする姿は、認めたくないが十樹もぐっと来るものがあった。
イヴはイヴで興が削がれたのか一度目が閉じられると、次に開いた時には拘束を解除したのかサイスは石畳の上に落下していた。
「これでわかった十樹。私の力が」
「そういうことかよ。あぁそうだな少しは見直したよ」
わざわざ煽ってまで言わせていた理由を理解した。
要するに神としての差を見せつけたかっただけのようだ。現にサイスはイヴの拘束に抗うことはできておらず、その実力は歴然と言う他ない。
ただその反動が全部自分に来ることは考えてもらいたいものだが。

「よくもやってくれたな。サイスを傷つけた借りは返させてもらうぞ」
ホレ見たことかと言わんばかりに鈴木は怒っていた。妙な喋り方を忘れるくらいには。
被っていたフードを外し下から金髪を顕にするが、これまた染めているだけなのか根本が神と一緒で黒いままだった。
「イヴお前後で覚えてろよ」
「じゃあ今忘れるわ」
つくづくいい性格をしていると厭味ったらしく言いたかったが、その暇ももうないようだ。
「戦いの合図は神同士が認めた瞬間から起きるから準備なさい。もう始めるわよ」
相手もイヴもやる気なようで、一人置いてけぼりをくらっている十樹は流されるままに合図を待つ。
「ほら雑草の神。あんたも準備しな」
「準備ならもう大丈夫だ地球の神」
両神は互いににらみ合いをし、十樹も鈴木と目がかち合う。やっこさんはやる気全開のようだが、こちらはまだやる気にはなっておらず、バランスが悪いこと甚だない。
それでも時は進み続け、呼応するように観客は盛り上がり続けていた。

イヴとエイスは指をピストルのように構え、指先が発光したかと思えば何かを打ち出した。

緩やかに進む発光体は丁度互いの中央付近で接触し、軽快な音と共に花火のように散る。

これが戦いのゴングなのだと知るよりも先に鈴木が動き出した。

第二章三幕　時を動かす能力

「燃えろ燃えろ！　フレイムタンが必殺。終わりなき炎（エンシェントファイア）！」

よくわからないが技名を叫びながら鈴木は右腕を下から上へと振り上げると、その腕から先の道へ順に火の手が上がっていった。

不味いと思い避けようと一歩足を動かしたところで、シモーヌの存在に気付く。迷ったのは一瞬だった。

側にいたシモーヌを抱き寄せて逃げようと手を伸ばし、突き飛ばされてしまった。彼女ではなく、見えない壁によって。

「馬鹿。能闘士以外に危害が加えられそうになったら自動で防がれんの」

今言うかと返そうと思ったがそんな暇もなく、やけくそに飛び退いた。もう目前まで迫っていたことから無駄かと諦めながらの跳躍だったが、跳んだ直後にしこたま頭をぶつけてしまう。

「いってぇ～。何がどうなってるんだ……」

じんじんと痛む頭を抱えたまま立ち上がると、そこは家のすぐ側だった。元々十樹が立っていたのは通りの中央付近のため、距離にして三メートルは離れていただろうか。

その距離を一足で飛び退いたことに驚きを隠せない。
「今のはほんのご挨拶。だがそこの可愛子ちゃんを庇おうとしたお前の熱いソウルは俺も気に入ったぜ」
チラリとシモーヌを見ている辺り、助けようとしたことを認めているようだ。
だが正直そんなものどうでも良かった。
「イヴ！」
「あんたが今体験したとおりよ」
「なんでお前はいつもいつも事後なんだっ」
これまで激しく動くことなどなかったことから気付けなかったが、どうやら身体能力まで向上しているらしい。運動はどちらかと言えば苦手だっただけに、好都合ではあった。
――今更だけど、ギルドに行くまで疲れることなく行けてる時点で前兆はあったわけか。
冷静に考えるフリをしながら実際に体験している戦いに、心臓が激しく脈打つ。
体が小刻みに振るえているのは武者震いと思いたいところだが、自分のことだからわかる。これは恐怖だと。
「終わりなき炎（エンシェントファイア）」

一直線にやってきた炎を横っ飛びで避ける。ハッキリ言ってそこまで大きく避ける必要はないが、実戦経験のない、おまけにまだ向上した体についていけていない自分では加減などわかるはずもなかった。

呼吸は自然と荒くなり、ただどうすると頭の中で考えるだけで何も思い浮かばない。

鈴木の三度目の攻撃を前に避けようと踏ん張ってから跳ぼうとして、あろうことか滑ってコケてしまった。

無様だとか情けないなどと考える暇もなく、炎が目の前まで迫りくる。

恐怖から目をそらすために目を閉じた。殻に閉じこもるように。現実から逃げるように。

でもそこへそっと手を差し伸べてくれる一人の女性がいた。

「十樹さん頑張って！」

シモーヌが応援してくれていた。ただそれだけ。たったそれだけなのに恐怖は消え失せ、体には力が湧き上がる。

そこへ追いかけるように蹴りつけてくる別の女性もいた。

「なんのために能力をやったと思ってんの、このグズ！」

イヴの叱咤にハッとし、考える前に使用した。時を止める能力と時を動かす能力を。

――――瞬間、世界は静止した。

聞こえていた歓声は鳴り止み、皆が人形のように固まった姿勢のままでいる。鈴木の能力で出された炎も燃えている状態で止まっており、迫りきていた三発目の炎もまた途中で途切れていた。

「これが本当の時を止めた世界、なのか?」

立ち上がりながら疑問を口にする十樹へ、一人答えてくれる人がいた。

「そうとも言えるしそうとも言えない。ただまぁ一応最低限は合格ね」

「イヴ。俺能力使えているってことでいいんだよな」

「ええそうよ。ただ今あんたは二つの能力を使用してるから燃費は最悪状態。その間に倒すにはあんたの鍛錬が足りなすぎだから取り敢えず避けときなさい」

色々言いたいことがあったはずなのに、初めて自分で能力を使えたことを把握できたことが衝撃的すぎて、頭から抜け落ちてしまった。

言われるがままに来るであろう炎から軸をズラし、体外に放出した感覚のある能力を体内へ引っ込めた。途端に世界は全てが動き出す。止まっていた世界は初めから無かったかのように。

「何、今のを避けただと!?」

「場所がズレた? 位相をずらす能力か?」

相手方はこちらの能力がわからないのか困惑していたがそれも致し方ないだろう。

転んでいた人間が気付けば立ち上がり別の場所に移動していたのだから。
「イヴ」
「相手はまだあんたの能力に気付いてないわ。本来そこそこ位がないと干渉させてもらえないのよ」
　それだけイヴが優れているということか。
　実際に他の神と出会って、自分といてくれる神がどれだけ力を持っているかをここに来て改めて知らされる。
「イヴ」
「さっきから名前を連呼するなうるさい」
「ありがとう」
「――――っ、さっさと倒して帰ってこい！」
　二度目の赤面にしたり顔で見やってから鈴木と向き合う。
「顔つき変わったな志島」
「人に恵まれたおかげだな」
「へ、孤高じゃなくて最高の交流ってわけか」
「あんたの神とだってそうなんだろ、鈴木」
　実にいい雰囲気だ。敵と書いて友と読みたくなるような言葉の交わし合い、だったは

ずなのに、

「だから俺の名前はフレイムタンだ！」

激高した鈴木が両手を突き出し、親指と人差し指を合わせて円を作った。

「籠の中の悪魔（デビルズサークル）」

再び技名を叫ぶとともに、十樹の周囲で一気に炎が湧き出るように燃え上がった。

逃げ道を塞がれ、どうしたものかと考えても全方位を囲まれている以上、逃げ道は上にしかない。

記憶が正しければ炎に囲まれるとそのうち酸欠で死ぬというのを見た覚えがあるため、長居するわけにはいかないからだ。

向上した身体能力にはまだ感覚がついていっていないが、囲んでいる炎の高さは二メートル程度。これくらいならば跳び越せるだろうと無駄に前向きに実行した。が、それが浅はかだった。

「かかったな。魔弾の射手（ハートブレイクショット）！」

跳躍で確かに炎は跳び越せた。そのかわりに飛び出た瞬間を狙われていたことに気付いていなかったのだ。脱出することに頭がいっぱいだった十樹は、鈴木が人差し指を突き出して狙っていること気付きもせずに、隙だらけの空中へと跳び上がった影響で、炎が衣服を燃やしだす。

不味いと思い着地と同時に地面を転がるも、燃え始めた炎は消えることはない。幸いガウンだけが燃えていたため脱いでから踏んづけて消火することで、やっと鎮火してくれた。それでもガウンはボロボロで、もう着れるような状態にはならなかった。

「いまのでも決めきれなかったか。中々にタフだ」

鈴木が何か言っているが耳には入らない。

そんなことどうでも良かったからだ。

――初めて女性に。シモーヌに貰った服だったのに……。

手に抱えた服は、この世界にきた自分の一つの証のようなものだった。とても大切な物で、これからも大事に着ていこうと思っていたシモーヌお手製の衣服。彼女にとっては何でもない行動だったかも知れないが、十樹としては本当に嬉しかったのだ。

――まだ一日だって着れてないのに……。

だというのに、今手の中にある服はもう修復不可能なまでに焼け焦げ、穴が空いてしまっていた。

「じっとしているところ悪いがトドメを刺させてもらおうか。でも安心しな。燃えたところで死にはしないぜ」

「……せっかくシモーヌがくれたのに」

「なんだって？」

ボロボロのガウンを握りしめ、立ち上がってから鈴木を睨みつけた。
「人の大切な服を燃やしやがって。絶対に許さなねぇ」
「いやいや、大切ならなんで着てきたんだお前」
「黙れっ！」
叫ぶと同時に駆け出す。
相手との距離は二十メートルあるかどうかだというのに、一秒未満でその距離をほぼなくした。
「なんだこの速さはっ」
慌てて何度も腕をふるい炎を発生させるが全て回避する。鈴木と自分では既に時間の流れが違うのだから。
炎の道が幾つも出来上がってくが、そんなものは無視をして懐へ潜り込み、
「ノロマ。そんなのが当たるかよ！」
再び振り上げられた腕に合わせて右拳を顔面に叩き込んだ。
意識して人を殴ったのはこれが生まれて初めてだったが、頬の柔い感触も、その先にある硬い骨の感触もお構いなしに振り抜く。
あまりに威力が高かったのか、鈴木は数メートルも吹き飛ばされ、脳震盪でも起こしているのか直ぐには立ち上がれていなかった。

但し場所が最悪だった。
乱発しすぎた炎は幾つも線が交わり、中には周囲を炎で囲んだ閉鎖空間も出来上がっていたのだ。
狙ってそこへ殴り飛ばしたわけではないが、鈴木は運悪くその中へ飛んでいき、ふらつきながらも立ち上がろうとしていた。まだ殴り足りないが、このまま放置しても同じような苦しみを味わうだろうと、炎の時間を動かし加速させ酸素を一秒でも早く消失させる。程なくすると鈴木は立ち上がろうとしている状態から崩れ落ち、酸欠からか気絶した。
それと同時に炎は最初からなかったように消え失せた。
「フレイム！」
サイスが鈴木の名前を叫びながら駆け寄っていくのと入れ替わるようにシモーヌとイヴがやってきた。
「やりましたね十樹さん！」
「初陣から勝つとか正直意外だったわ」
二人の表情は差異があれどにこやかに迎えられていることがわかる。わかるだけに辛かった。左手に握りしめたままだったガウンを手に、シモーヌへ思いっきり頭を下げた。

「ごめんシモーヌ。せっかく仕立ててくれたのに、ボロボロにして。これじゃあもう着れない、よな」

今できる精一杯の謝罪を述べた。

自己満足と言われてもいい。作った人の労力を無駄にしたと揶揄されてもおかしくない。

鈴木の言う通り最初から脱いで戦っていればこうはならなかったはずなのに、自分の考えなしっぷりがこの結果なのだ。

だというのにシモーヌは優しく手を握り、

「問題有りませんよ。だってまた作ればいいですから」

笑顔でそう答えてくれた。

あまりに眩しい笑みに思わず涙が溢れそうになるも、

「作らなくてもいいわよ」

イヴが指を弾くと、握りしめていたガウンは初めて見た時と同じ状態で手の内にあった。

「何驚いてんのよ。終わったんだからそりゃあ元通りにするでしょ。ほっといても直るけど待つのが面倒だから私が先に元に戻しただけよ」

「そういうことは早く言えよぉ……」

なんでこうこの女神は一言余計なくせに説明不足なのだろうかと、一日かけて問いただしたい気分になるが、それよりも初めての戦闘が終わったことで膝が折れ、脱力する方が先だった。
「だ、大丈夫ですか十樹さん」
「腰が抜けたようなものだから大丈夫よ。どうせ後少しで家に強制転送されるし気にかける必要はないわ」
実際立てないのはその通りのため何も言い返せず待っていると、町の通りだった景色は一変し、飛ばされる前の状態に戻された。
イヴもシモーヌもそれは同じようで、三人揃って椅子に座って帰還していた。
「終わった、のか？」
「ええ、あんたの勝ちで初戦は終了よ」
「おめでとうございます十樹さん。今日は～、もうお夕飯すませちゃいましたし明日はご馳走を準備しますね」
「いいよそこまで気張らなくても」
「駄目です。そうじゃないと私は給料ドロボーになっちゃいますから」
――シモーヌの笑顔には敵わないな。
彼女の笑みの前では反論など意味を成さないようで、大人しく受け入れることに。

「楽しみにするよ……それにしてもふぁっ、急に眠くなってきたな……」
ドッと疲れが襲ってきたのか、気が抜けた瞬間一気に眠気に襲われてしまった。頭がフラフラし、意識もボーッとしだす。
「大丈夫ですか。今日はもうお風呂は止めてそのまま寝てしまいますか?」
シモーヌの言う通りそれは大変魅力的な言葉だったが、あれだけ炎の中を動き回ったのに風呂に入らないのも気持ち悪い感じがし、どうしようか悩んでいるとイヴが教えてくれる。
「能闘士の戦いは終わった時に傷も汚れも破損も全部綺麗にしてくれるのよ。だから眠いならそのままベッドへ行きなさい。体力とか生命力だけは使用した分そのままだから睡眠は重要よ」
イヴにしては珍しく優しい声音だった。それこそ初めて声をかけてくれたような、本当に女神のような優しさのある声色はまるで操られるように自分の体を動かし、自室へと戻ってベッドへと倒れ伏した。
そこから目が覚めることなく、起きたのは日が昇ってからだった。
「おはよう〜」
寝ぼけ眼で一階へ降り、あくびをしながらキッチンへ向かうと、既に二人は起きており食後なのか紅茶の香りがしていた。

「おはようございます。朝ごはんは食べられそうですか？」
「あーうん。少し多めにしてくれると助かる」
　シモーヌにお願いし、十樹は目をこすりながらまだ慣れない自分の席へ腰を下ろした。
「どんだけ寝てんのよあんだ」
「知らないよ。時計ないんだし」
　時計自体は存在するようだが、小型のものはまだ作られていないらしく、町に大時計があるだけ。日中は一時間ごとに鐘が鳴ることである程度時間の把握はできるが、起きたばかりの十樹がわかるはずもない。
「ほら、これ上げるからしゃんとしな」
　テーブルの上をこするようにして投げてきたものを受け止め、目元まで上げてなんなのか気付く。
「腕時計。いいのか？」
　紛れもなく腕時計だ。それも作りはしっかりしており、ややごつい見た目をしている。だと言うのに重量はあんまり感じられず、不思議なものだった。
「私が創ったのよ。頑丈どころか私と同レベルかそれ以上の神じゃなければ壊せないほどの強度のものよ。解体も不可で仮に盗まれてもあんたが念じれば手元に来るように

してるわ。調べ物があればそれである程度はわかるようにしてあるし、目覚まし機能もある。同じものをシモーヌにも上げてるから電話代わりにも使いなさい」
「マジで？　ハイスペックすぎだろこれ。神が能闘士（マギア）への手助けって限度があるとか言ってたよな」
「能闘士（サバト）の集いの最中はね。まぁ日常でもやりすぎると抵触はするけどこれくらいならギリ範疇よ」
　時計に辞書に通話とか向こうの世界に置いてきた携帯電話と同じじゃないかと思ったが、逆を言えばその範囲内のため許されているということだろうか。
　――念じれば手元に来る時点でオーバースペックな気はするけど、イヴがいいって言ってるんだからいいんだろな。
「ありがと」
　シモーヌならすんなり出ていた礼の言葉も、イヴ相手では若干ぶっきらぼうな言い方になってしまい、内心ハラハラしてしまった。お礼の言い方で険悪にはなりたくないからだ。
　しかしそれは杞憂だったようで、イヴへちらりと目を向けると視線が交差した次お瞬間には首ごと反らされ、
「ふ、ふん。あんたに礼を言われるとか虫酸が走るわ」

言葉こそ邪険に扱ってくるがキレは悪く、満更でもなかったようだ。
「違いますよ十樹さん。イヴ様は初陣で勝てたお祝いにそちらの物を作られたんですよ」
「ちょ、ちょっとシモーヌ。それは言わない約束だったでしょ！」
しかも援護射撃が有り、イヴにしては珍しく慌てていた。なんだかんだで彼女もシモーヌには弱いようだ。
「へぇ、イヴがねぇ」
「何キモい顔してんのよ童貞」
「な、童貞は関係ないだろ！」
「あるわよ。女からのプレゼントなんて貰ったことないじゃない」
「それはっ」
事実だけに言い返せず、気分のよかった心の中に苛立ちが増えそうになった。
「まぁまぁ、イヴ様もここは素直になりましょう」
「……わかったわ。その、十樹。今のは悪かったわ。あんたの勝利祝でそれ創ったから、大事にしなさいよ」
しかしシモーヌは見事なまでに場を支配し、綺麗に負の感情を洗い流していった。
「俺も突っかかるようなこと言って悪かった。これ大事にするよ」

しどろもどろとながらも返事をしていると、シモーヌがテキパキと朝食を並べていってくれる。

実に食欲を誘ういい香りに手を合わせるよりも先に、腹の虫が反応を示していた。

二人にも聞こえてしまったか、吹き出しているのを前に十樹もつられて笑いつつ、今度こそ手を合わせて言った。

「いただきます」

第三章一幕　特訓

鈴木との一戦から五日が経過した。

まだ次の戦いの報せはないようだ。

なんでも前日には必ず知らせが来るようにできているそうだが、二回戦の始まりを知らせるゴングは響く気配がない。イヴによると今十樹が参加しているブロックは全部で四名。つまり後二回戦えば終わるのだそうだ。

逸る気持ちはあるものの、ないものはないのだから仕方ないと、十樹は地下一階で準備運動をしていた。

そう地下一階である。

シモーヌの家はイヴが内側だけ拡張したことで二階の建物へ作り変えられたかと思っていたが、実は地下一階も作っていたのだ。

ここは能闘士《マギア》の、能力の練習場として作っていたらしく、空間は無駄に広い。正方形の形をしているようだが、一辺が四十メートル近くはあり、天井までの距離は五メートルはくだらなかった。

それでも向上した身体能力を前に考えると、これでも狭いと言えてしまうのだから恐

ろしいものである。
　これまでインドアな生活ばかり行ってきた十樹だが、先日の戦いを経て少しは運動をするべきだと思い初めたことなのだが、想像していたよりも気持ちよく体が動かせることとから半ばハマり始めていた。
　イヴによると身体能力の向上は肺活量や体力そのものにも影響があるそうだ。
　おかげで一〇〇メートル走ったくらいで息切れをしていたものが、今では数キロを容易に走れており、今もアップで一キロを走ったところ。息切れどころか体がやっと動き出したかなと思えている辺り実に愉快である。
「お疲れさまです。タオルは使われますか？」
「汗かくほどじゃなかったし大丈夫」
　シモーヌが差し出したタオルを断った。
　脇には水筒がぶら下がっており、実に優秀なサポート役として彼女はやってくれている。
　元々運動を始めたきっかけも彼女ではあるが、このことは本人には秘密だ。
　一回目の戦いで無様なところを見せてしまったため、運動を決意したのは間違いではないが、もう一つ理由があり、シモーヌに格好いいところを見せたいという願望である。彼女の前で自分の想像通りに格好がつく感じにやるため、決意したのが始まりだ。

「よ、ほ」
何度かジャンプをすることで自分の状態を測る。
着地する反動を利用して高さを上げていき、最後には全力で跳び上がった。
目指すは五メートル先の天井。しかしやはりというべきか思いっきり跳んではみたも、四メートル辺りが限界なようでカスリもしなかった。
「惜しいな」
「何処がよ。全然届いてないじゃない」
イヴがいつものように悪態をついて表れた。
「人が頑張っているのにそれか」
「頑張って跳ねてるってことはあんたはバッタか」
「だーもー何しに来たんだよ」
あんまりな言われ方に反射で返してしまい、しまったと焦る。
「へぇ、人に頼み事をしておいてそんな態度取るわけか」
女神の言う通り、昨夜実践的な稽古をしたいとお願いしたのは自分だ。なのに何をしになどと言っていいはずもないのだが、つい口が滑ってしまった。
ご立腹のご様子であるイヴは、無造作にぱちんと指を鳴らすと、弾かれるように宙に浮いたかと思うと、四方八方へ衝撃を伴いながらも吹き飛ばされた。彼女なりの優しさ

なのか、衝撃はあるのに痛みはなく、けれども体がシェイクされていることは変わらず気分が徐々に悪くなっていく。
「い、イヴぅ、わわ、悪かったから、とめ、め」
「イヴ様」
「……わかったわよ」
流石はシモーヌ。彼女の鶴の一声は神をも動かす奇跡の言葉だ。
ぐったりした状態で地面に降ろされた十樹は、天井を眺めながらもゴロンと寝転がる。床は幸い芝生が敷かれているため、痛くなければ冷たくもなかった。
だらしのない声を出していると、シモーヌが駆け寄ってきてくれ、遅れてイヴもやってきたかと思うと、腹部を踏んづけてきた。
「最近あんた調子に乗ってきているようだから言っておくけど、私は女神よ。あんまり上から物を言わないことね」
「はいはい今回は俺が本当に悪かったよ」
「ち、意外にこいつ慣れてきてやがる」
口調が女神らしなからぬ物言いで呆れそうになるが、踏んづけてきた足は痛いと感じないギリギリな塩梅なため、軽く払いのけるだけでどいてくれた。おまけに、
「お加減はどうですか」

「今イヴが治してくれたよ」
　気分の悪さもなくしてくれたあたり、なんだかんだで優しいのだ。サイスへの仕打ちを見る限り、人間へは過度な危害を加えようとしていないのだろう。逆を言えば神相手では遠慮がないとも言えるが。
「ほらささっと立つ」
「それはいいけど結局何をやるんだ？」
　実戦形式でやると言ったのは確かに自分だが、その時イヴに「やり方は私が決めるわ」と言われ、結局詳細を聞かされることなく日を跨いでしまったわけだ。
「早い話、あんたは雑魚よ。鵝毛《がもう》をそうね、戦車で例えるならあんたはクソ雑魚ナメクジね」
「ナメクジはともなくクソ雑魚の部分はいらんだろ……」
「それほど差があんのよ。あんたとあの爺さんとでは」
　聞く気はないのか、サラリと流されてしまった。
「先に言っておくけどあいつはこの能闘士（サバト）の集いには参加しないわ。あまりに強すぎて対戦相手が全員逃げ出すから。ま、知らずに戦ったのもいるけど瞬殺ね」
「そんなに差が出るほどなのか？　同じ能闘士《マギア》だろ。能力だって多少差異はあるだろうけどやりようじゃないのか？」

少なくとも能力の違い以外では、実際に戦った鈴木と自分との差なんてわからなかった。あの時はがむしゃらにやってなんとか勝てただけで、また勝てるという自信は正直ない。

「馬鹿ね。なんで私が、あんたが体を鍛えていることに口出ししてないかわからないの」

「なんでって見ていて面白いからとかじゃないのか？」

イヴならばやりかねないと思って言ったのだが、不服だったのか半眼で睨んでくる。

「あんた人を馬鹿だと思ってる？　言っちゃ何だけど私の力は全知全能に等しいわよ。今あんたと話している私でさえ所詮分霊でしかない。その上この世界じゃ力に制限までかせられてるのよ。そこまでしないと力がありすぎるから」

「ぶんれい……あぁ、分け御霊って奴か。え、じゃあお前の本体は」

「私の本体は地球そのものと言っても過言じゃない。だから今も地球にいるわ。因みにサイスは雑草の神、正確には白詰草《シロツメクサ》の神ね。あんたでもわかるように言えばクローバーよ」

「へぇ、八百万の神の国って言われてるけど、本当は地球そのものがそうなんだな」

スケールがデカすぎていまいちピンとは来ないものの、それでもイヴの出鱈目っぷりの一端が知れたよう気はした。

「じゃあイヴ、今のお前の歳って地球とおな」

「――――死にたい？」
　地球と同じなのかと言いかけたが、顔は笑みを浮かべているのに目だけは笑っておらず、今までで一番怖い表情をしていた。
　その反応自体が答えているようなものだが、身の安全のために口を閉じることに。
　いかに神といえど、年齢の話は禁句なようだ。
「あのー、神様ってそんな沢山いらっしゃるんですか？」
　一人置いていかれていたのか、シモーヌが恐る恐る手を上げながら問うてきた。十樹は話題がずらせると、内心ガッツポーズを取る。
「ええそうよ。この世にある全てのモノには神が宿るの。例えば今シモーヌの着ている服とかもそうね」
「服の、神様ですか？」
「まぁわからないのも無理はないわ。この世界だと成立しない理《ことわり》だもの」
「ちょっと待て。じゃあこの世界って唯一神なのか？」
　思わず口出しをしてしまったが、イヴは機嫌を損なうことなく答えてくれる。
「まぁ当たらずとも遠からずね。ここを創った神は正確にはシステムだけ作り上げて放置しているのよ。だからいないけどいるのと同じことができる」
「二つの意味で次元が違うってわけか」

元いた世界ともそうだが、イヴよりも優れた神がいると言っているのだろう。でなければイヴが大人しくこの世界にあるシステムに従順なはずないからだ。

――まだ他の星に来たような気分でいたけど、本当に次元が違うんだな。

今更といえば今更だが、実感と知識が合わさることで否定する要素が失われた。神など元いた世界でも見えも触れもできなかったが、なんだかんだでいると潜在的に思っていたのだろう。

そう思うと色々スッキリし、納得もいった。

「全然わかりません……」

シモーヌは一人申し訳無さそうに俯き、しょぼくれていた。

「安心なさいシモーヌ。こいつがわかったのだって偏って覚えただけで、他なら理解する知恵もないただの馬鹿だから気にしなくていいわ」

またしても人を貶すようなことを言っているが、今回はシモーヌを元気づけるためということで、大人しく引き下がることに。

「要は色んなものに神は宿る。神がいないものはないって覚えればいい」

「そういうことよ。まぁこいつのサポートなんてやっていたらそのうち嫌でもわかってくると思うから今は気にしないことね」

諭されたことで納得しきれてはいないが、取り敢えずは了承してくれたようで、頷い

て見せていた。
「それじゃ疑問も解消されたことで十樹、始めるわよ」
　お預けを食らっていた訓練開始の合図に胸が高まる。胸の前で左手の平へ右拳をぶつけて気合を示す。
「どんとこい」
「それじゃあ私に攻撃してきなさい。時は止めてもしょうがないから動かすだけに留めておくように。こっちをある程度操れるようになれば多少はマシになるはずよ。言い忘れていたけど、鵝毛はあんたがやった天井までの跳躍だけど、簡単に届くわよ」
「あれ以上にできるようになるのか」
「あんたが成長すれば同じことができるようになるわ。わかったら全力で来なさい。どうせ一発も当てられないから」
「言ったな」
　性格に難はあれど見た目は可愛い女の子。多少引け目を感じていたが、仮にも相手は神であり、本人が言うのだからいいのだろうと一旦後ろを見ながらバックステップを踏んで距離を取った。
　腰を落としいつでも走れるようにしてから、一気に飛び出す。
「死ねぇ！」

加減するほど器用でもない。身体能力をフル活用し、全力で真正面から突っ込み、思いっきり右の拳で顔面を殴りに行った。

第三章二幕　女神への挑戦

「誰に言っているよ」

しかしイヴは平然と立っていた。それもそのはず。拳はイヴの数センチ手前で止まっており、押し込もうとしてもピクリともしない。その場でミドルキックを放ってもそれは同じで、直前で防がれてしまった。

「こんなんじゃあくびが出るわ」

有言実行なのか、本当に目の前であくびをしており、動きが優雅だけに尚更腹立たしい。

もう容赦しないと自分へ時を動かす能力を付与し、早めた。

初めて使った時は無我夢中だったが、使っていてわかったのことが幾つかある。時を止めている際に自分へかけていると、自分だけは時の流れの中にいて、それが影響して動ける点。もう一つは自分以外にもかけられる点だ。相手の時間の流れを操作することで遅くできることで、相手にはこちらが早くなったように見させることが可能なところ。

結果論ではあるが、あの時いきなり実戦になったのは本当によかった。もし先に試し

ていたら、時を動かすだから時を止めている間しか使えないのではなどと、凝り固まった思考しかできていないところだった。
だからそのお礼にイヴへ一発お見舞いしたいのだが、
「少しは考えたようね。浅はかだけど」
イヴへ動きが遅くなるように動かしたはずが、普通通りに喋り、反応までされた。
向上した身体能力を駆使し、自分の時間まで早く動かして背後へ高速で回り込んだにも関わらず、殴りに行くよりも先に風が吹いたかと思うと後方まで吹っ飛ばされた。
「ぶへぇ」
醜いうめき声を上げながら背中から落下し、反動で自分の膝が鼻へ直撃してじんじんと痛む。
「本物の豚みたいな鳴き声を上げるのね」
心底愉快そうに言ってくる辺り実にイヴらしい。
痛みへの耐性のおかげで背中の痛みも特になければ鼻血も出ていないようだ。
ならばとできる限り自分の時間を早く動かし急接近するも、今度は足元から地面がせり上がり、再度後方へと返された。
しかも同じように落下して。
「ふがっ」

「ぶふっくくくく。あんた本当にギャグみたいな落ち方するわね。漫才やったら受けるんじゃない」
　口元を押さえてはいるが、漏れ出ているのだから意味などない。寧ろイヴのことだ、聞こえるようにやっていると言っても過言ではないだろう。
「くそ、今に見てろ。絶対見返してやるっ」
　そこから何十度となく攻め込んでは投げられ、攻め込んでは吹っ飛ばされと続き、結局一度たりとも触れさせてもくれなかった。
「はぁ、はぁ、はぁっ。なんで、全然、上手く、いかない、んだ」
　いつしか呼吸は荒くなり、体もふらつき始めていた。
　もう一度と攻め込むも容易に躱され、デコを掴まれると同時に足払いを受け、後頭部から地面に落とされた。
「がはっ」
「ま、こんなところね」
「ま、まだまだ……」
　自分でもここまで負けず嫌いな性分だったとは知らなかった。途中まではまだシモーヌの前だから格好つけようと必死にやっていたが、後半は何もできていないことを払拭するべくやっていた。

結果は惨敗であり、傷らしい傷はないものの全身汚れてしまっていた。
「止めときなさい、初めて能力使った時のことを覚えているでしょ。今あんたは能力をギリギリまで使っている状況よ。その疲労度を覚えていくことね」
「でも俺は」
「でももクソもない。ガキかお前は。限界を知るのも必要なこと。後もうちょっと受け身を覚えなさい。痛みは疲労へ直結するわよ」
言い方こそ悪いが、足りない部分を丁寧に説明してくれた。くれたのだが、やはり自尊心がそれを認めてくれない辺り、自分の小ささを自覚してしまう。
震える体を懸命に起こそうとするが、膝が笑って膝をつくのが精一杯だった。
「ふん、神相手に勝てるわけないのに、何いっちょ前に悔しがってんのよ」
「う、うるさいっ」
心を見透かされたようで、子供が駄々をこねるように言い返してしまう。それが更に自分を苛むのだが、止められそうもない。
「十樹さん。こちらお茶ですがどうか飲まれてください」
いつの間にか近寄ってきていたシモーヌが、水筒に入れておいたであろう紅茶をコップに入れて差し出してきた。
自分の小ささに羞恥心を覚え、彼女を直視できず目をそらしながらも受け取り、一気

飲みした。
熱いかどうかも確認せずに飲み干した紅茶は温く、程よい口当たりで喉の奥へと消えていく。胃へとついた辺りになって気がついたが、紅茶は甘く、かといってクドくないほどよい塩梅で、疲れた体にちょうどよかった。
だからこそ自然と言葉が出た。
「ありがとう。美味しかった」
「ふふ、それは何よりです。もう一杯どうですか？」
「頂くよ」
本格的に座るため、尻餅をついてからコップを差し出すと、シモーヌはもう一度注いでくれ、今度は味わいながらも一口一口確認するように口へ含んでいく。飲み込むと疲れも弱さも洗がなすように溶けて消えていく。全身にじんわりと行き渡り、心の平静が保たれた。
「シモーヌには敵わないな」
「どうかされました？」
「感謝してるってこと」
何を言っているか理解はされていないようだが、それでいい。これは自分の問題だからだ。

「これでわかったとは思うけど、あんたに足りないのは実戦と体力と体術と能力の使い方ね」
「全部言わなくてもわかってるよ。要は経験が足りないってことだろ」
　せっかく人が人心地ついたところなのに水を指すようなことをと見やると、至極真面目な顔で見下ろしてくる。
「ド素人がわかった気になってやるほうが危険だって元いた世界で学ばなかった？　駄目なところは直せなくても把握する事自体が重要なのよ」
「わ、わかったよ……」
　確かに素人ほど何故か何でもできるような気がして、実際危険なことだって平気と思いやってしまうことはある。その結果怪我を負う程度で済めばいいが、場合によっては命を落とすこともあるのだから重要なことだ。
「でも体力つけるのは走り込みとかしていればいいのはわかるけど、体術なんて何も知らないぞ。受け身もそう。もしかしてイヴが教えてくれるのか？」
　最後の投げ技は中々に気持ちいいくらい綺麗に決められていることから、ひょっとしてとも思ったが、即座に否定された。
「なんで私が。面倒くさい」
「だと思ったよ。じゃあどうするんだ？」

「ギルドに治安維持をするためのところがあるのよ。そこの誰かを雇って教えてもらうのが早いわ」

　言われて脳内に浮かんだのは二つの事柄。一つは国が管理する騎士団で、そちらは軍と警察の両方を兼ね備えている。もう一つのギルド側は自警団のようなもので、国や町と契約して治安を護るのが仕事なのだとか。それ以外にも道場のようなものを開いており、自衛手段を教えていることもあるそうだ。

「へぇ、それって出張とかもできるのか」

「ま、そういうことね。その分高いけど、暫くはあんたの能力は伏せておきたいから集団の中で使わせるわけにはいかないのよ」

「別にそうホイホイ」

「あんた洗濯物早く乾かすのに使用したの、バレてないとでも思った？」

「うぐっ」

「シモーヌが買い物行ってる間に先回りして偶然を装っていた時も使っていたわね」

「はがっ」

「それにあんたシモーヌのし」

「――――わかった。俺が悪かったからもう止めてくれ！」

「そう、わかればいいのよ」

実に愉快そうに見下ろしてくるが、こちらとしてはこれ以上バラされると、シモーヌの隣に立てる自信はない。

いや別に彼女の下着を取るとかそういうことはやっていない。ただやろうかどうしようか悩み、能力まで行使したが、結局未遂で終わっている。未遂ならば犯罪ではないはずだと自分へ言い訳を並べていく。

一人小首をかしげているシモーヌの顔を見ると胸が苦しくなる。罪悪感で。

「えっともしお買い物へ行きたいようでしたら、今度ご一緒しますか？」

気遣いで言われた言葉が優しすぎて、逆に針のように心を突き刺してくる。

イヴは始めっから結果がわかっていたのか、ニヤニヤと笑みを浮かべているが、腹立たしさよりも自分の愚かさのほうが強かった。

「わかったなら明日にでもギルドへ行ってくることね。そしてちゃんと言うこと。猿でも覚えるまでしっかり教えてくれる人を寄越すようにと」

優しさの欠片もない物言いだが、知識がまるでないのは事実。いじられた精神を回復させるにはまだ時間がかかるようで、くどくどと言い返す気力もなかった。

「じゃ、私はゆっくりさせてもらうわ」

そういいこの場を後にしようとしていたイヴの足は、急に止まったかと思うと、玄関が激しく開かれる音が地下まで響いた。

「へいブラザー。遊びに来たぜ」
「同じ神の好(よしみ)だ。仲良くやろうじゃないかイヴ」
顔は見えなくても誰が来たかは喋り方だけでわかった。
鈴木晶と神のサイスだ。
それこそシモーヌの買い物に追いかけた日、ばったり町中で出会い家に招待したのが始まりなのだが、その日の夜に怒気を含んだ目でイヴから見られたのは記憶に新しい。
今も嫌なのか肩を震わせており、
「雑草共は出ていけぇ！」
「へぶぁっ」
上でなにかされたのか、品のない声を上げながら遠退いた音だけが聞こえてくる。
ご愁傷さまと誰に祈るでもなく思い、乾いた笑いがこぼれ落ちた。

第三章三幕　神の秘密

「体術教えてくれる相手か。それなら知ってるぜい」
「本当か鈴木」
「だから俺の名前はフレイムタンだ！」
「はいはいわかった今度から気をつけるよ」
「……ち、なんでこいつらが」
あれから二人は懲りずに挑み続け、最後にはシモーヌの一声でこうしてダイニングキッチンまでやってきた。
普段長方形のテーブルの縦方向に十樹とイヴが向かい合うように座っており、シモーヌは横にいるのが定位置だ。因みに十樹は入り口側で、イヴは「私は神だから」と言って奥の上座の方にいたりするのだが、今は横方向のシモーヌの向かいに鈴木とサイスが仲良く肩を合わせて座っていた。
「お茶、なくなりましたら言ってくださいね」
「はい、ありがとうございます」
「まるで彼女は女神のようだ……」

　既に男二人を骨抜きにしている辺り流石である。自分も他人事ではなかっただけに、親近感を覚えた。
「あぁそう、じゃお祈りも済んだでしょ。帰った帰った」
　本当の女神と言えばチンピラじみた言い方で追い返そうとしている辺り、どっちが女神なのかわかったものではない。
「それがブラザーに報せることがあったわけだな」
「今日は我々ファンキーズの戦闘報告に来たのさ」
「戦闘報告って、二回戦あったのか!?」
　思わず立ち上がってしまった。
　チーム名は激しくどうでもよかったが、まだ十樹には次の戦いの報せがないだけに驚きを隠せない。
「おぅそうだぜい。昨日の昼に戦った。相手の名前はトゥーレ・ソリヤ。見た目年齢だと中高生くらいか」
「フレイムは新必殺技の天使の包容（エンジェルハグ）を使ったけど、結果は敗北だった。惜しかったんだけどね」
「いやいいさサイス、今度勝てるようになれば」
「そうだったなフレイムっ」

鈴木とサイスは何やら互いにテンションでも上がってしまったのか、肩を叩きあい、最後には互いに肩を組んでいた。

シモーヌは笑顔で見ているが、イヴは辟易した顔でだらけており、十樹も顔が引きつりそうになる。が、一つ気になることが思い浮かび問いかけた。

「ところでなんで技名なんてつけるんだ?」

少なくとも十樹は技名なんてつけていない。それ以前に技らしいものを作れていないのも原因だろうが、つけようとも思っていないだけに疑問だった。何か技の威力が向上するのだろうかと。

「格好いいからだ!」

しかし実際は違うのか、力強く明後日の方向で教えてくれた。

「は?」

「だから格好いいからだ。そうは思わないか? 技を放つんだぞ。そりゃあそれに見合った技名を言わないのは嘘と言うもんさ」

「いやだから……」

「言っても無駄無駄。言ったでしょ。馬鹿だって」

イヴはやってられないと、手首から先を振っていた。それは思考放棄を意味しているとも取れるし、この二人を追い出す素振りにも見えた。

どちらにせよ、終始歩み寄るつもりはないようだ。
「ふん、最高位レベルの神だからってフレイムの崇高な考えがわからないようだな」
「よせやい。俺はただ人として当たり前のことを言っただけさ」
「はぁ、神が人間を崇めるとか世も末だわ。流石雑草」
「地球の神は力の強さの割に器は小さいだだだだだだだだだだ」
「ほざけ最下級」
いきなりサイスが痛みを訴えだしたが、何処をどうやられているのか十樹にはわからない。ただ尋常ではない痛みのようで、受けてもいない十樹も身悶えしそうになった。
「またこの女神は。サイスを開放しろ！」
「そいつがじゃれ合いに来るから相手してやっているだけよ。しかもそいつ若干喜んでるから」
「どこが――――」
言われてみれば確かに頬は紅く染まり、痛みこそ訴えているものの、なんだかんだで悪くなさそうな顔をしていた。
鈴木もサイスの顔から察したのか二の句が続けられず、困惑している。
「イヴその辺にしといてやれよ。そもそもそんなことしてるといる時間が長引くだけじゃないか？」

「それもそうね」
　イヴはやっと開放したのか、身悶えていたサイスは呼吸が荒いままテーブルへ突っ伏し、体をビクンビクンと震わせていた。
「お前らの力の差ってかなりあるのか？」
「見てのとおりよ。こいつじゃ私に抵抗なんてできるわけない。私の管理化にある神の一つなんだから」
「どういうことだ？」
「こいつは地球の中にいる神の一つ。そして私は地球の神。地球にいる神は全て私より下よ。おまけで言うなら地球は若いながらも成長が著しいことから、神格として高位にいることになる。それが私」
「あぁ、それもなんだけど、ひょっとしてこの世界に来ている神と人って地球から来ているのか？」
　一番気になったのはそこだ。
　てっきりイヴは鈴木のこともサイスのことも、神の力で把握しているのかと思ったが、初めから知っているのなら話は別だ。誰が来ているかも、どのような神がついているかもわかるのではなかろうか。
「大半はそうよ。名前の通りそこの鈴木晶も日本出身だし」

「フレイムタンだ」
「あぁ？」
「あ、いや……」
　イヴにガンを飛ばされ萎縮したのかそれともそちらが素か、十樹の時とは打って変わって全力で訂正しに来ることはなかった。
「他のところから来たりもするけど、基本は地球が多いわ。でも今日言った通り私は分霊。こっちに来る際にその辺の情報をスッパリ切り落とされているから、神や転生した人間のことは目や耳にしなきゃ思い出せないのよ」
「そんなに凄いんだな、唯一神って」
「正式には時界神（じかいしん）ね。まぁ私も近いことできるから、色々反則ができないこともないけど、メリットが薄すぎてやる理由がない」
「それなんだけど実際全力出したらどれくらいできるんだ？　サイスもだけど」
　痛みがやっと引いたのか、頭を起こしたサイスは自分もかと指を指し、少し考える素振りをしてから口を開く。
「そうだなぁ。地球を植物で埋めるくらい？　あーでも頑張れば月とか火星にもできるかも。あっちの神が許したらだけど」
「まぁあんたはそんなもんね。私はもっと凄いわよ。あんた『無』はわかる？」

「『無』？　何もないというか宇宙としてすら成り立っていない空間のことか？」
「えぇその通り。私はそこに銀河が創れるくらいね」
「……は？」
今なんと言っただろうかこの女神は。
――銀河？　銀河ってあの銀河か？
想像していたスケールを余裕で超越し、銀河がゲシュタルト崩壊しかけていた。
どういうことだと何とかしてサイスへ視線を送ると、残念そうに頷いていた。
「マジで？」
「ふふん、これでまた私の実力がわかったようね。因みにだけどこの次元を創ったのも私よ」
「なんでだ。ここってえっと、時界神だっけ？　が作ったんじゃなかったのか」
「細かいところまで創ったのが時界神だったってだけ。基盤は私。懐かしいわね、何億年前だったかしら。一度私家出してね、地球を一回離れたのよ。んで自分だけの銀河がほしいなぁっと思って創ったはいいけど、それ以上やると消すぞって時界神に脅かされて泣く泣く戻ったのよ」
「やることなすことダイナミックすぎるだろ……」
「神なんてそんなもんよ。人間の尺度で考えてるあんたが馬鹿なだけ。それにしてもこ

こに来るだなんて思いもしなかったわ」
「来たことなかったのか？」
　実に意外だった。
　イヴの言う通りの力があるのならば、一度くらいならば飛んでこれそうなものだが、やっていないことが実に不思議である。
「私は参加する理由がないのよ」
「君の悪癖だな。どうせ説明していなかったんだろ」
「うるさい黙れ」
　指をくんと上げると同時にサイスの首が弾かれたように跳ね上がり、首の位置が戻ると顎を抑えていた。
「なんて暴力的なんだ……まぁいい。転生した人に神がついてきている理由って知っている？」
「そういや聞いたことないな。なんでだ」
「神と言っても僕。ううん、俺とそこの女神のように位が違うけど、この世界で名を馳せたり特定の結果を出すと神にも還元されて位が上がるんだ。因みに特定の結果には前にいた魔王みたいなのを倒すことや、今だとメインは能闘士（サバト）の集いで何度も勝つこと」
「へぇ、そんなシステムなんだな」

不思議には思っていたのだ。イヴの本来の力を正確に知らなくても、わざわざ一緒にいる理由はないだろうにと。直ぐにほっぽり出さず、ずっといるのはそういうことかと頷く。

「最も私には関係ないシステムよ」

「なんでだ？　位が上がるならイヴにも関係あるだろ」

「ないのよ。ほぼカンストしてる神はどう足掻いてもその先にはいけないの」

「……二人はわかるか？」

シモーヌや鈴木へ話を振るが、両者ともに首を横へふる。勿論十樹もわからないため補足をしてもらった。

「ったく理解力なさすぎない。いい、あんたにもわかるように言うなら位はレベル。力はパラメーター。私のレベルはもう最高。んでパラメーターはまだカンストできてない状態なだけ。わかった」

「あぁそういうことか。時間をかければ神は位を、レベルを上げられるけど一気にレベルを上げてくれるのがこの世界ってことか。でも上限はあるからレベルがマックスであるイヴには関係ないと」

「そういうことよ――――あー疲れた。これ以上は面倒すぎて相手してらんないわ」

イヴは立ち上がり自室へと向かおうと出かけたところで、サイスの口が開かれる。

「伝えるのを忘れるところだった。俺たちが相手をした能闘士の神はカグヤだったよ」
「……今なんて言った?」
聞き捨てならないのか、イヴは歩みを止めて振り向いた。
「カグヤ。月の女神カグヤが同じブロックにいる」
「そっかあのクソアマが同じブロックだったなんて運命も面白いもんね」
直ぐに顔を背けたことから表情こそ見えなかったが、声は今までで一番冷ややかだっただけに、因縁浅からぬ関係なようだ。
触らぬ神に祟りなしとはいうが、少なくとも十樹はイヴをパートナーのように思えてきているところのため、聞かずにはおれなかった。
「かぐやってあのかぐや姫のことか」
「あんたの言うかぐやは私の知っているカグヤを題材に考えられたものよ。詳しいことは今度。今は一人になりたいわ」
そう言い残し、イヴは自室へと戻っていった。
数日共に過ごしてきたが、あのような反応を示すイヴは初めて目にし、かなり意外だった。
サイスは何か知っている節だったが、守秘義務に反するのか何も教えてくれず、この日はこのままお開きとなる。

第三章四幕　肉体の使い方

翌日ご丁寧にも鈴木はもう一度顔を出し、体術の教育をしてくれる人を紹介してくれた。

「フレイムに聞いたよ。あんたが教育希望者」

場所はギルドの総合受付窓口。ジェイミーと会話していたのもそこそこに、背後から声をかけられた。

振り向いた先には髪をポニーテール纏め、上着は赤いシャツだがその上に白いジャケットに白いズボンを履いていた。ジャケットには拳を交差したようなバッヂがついており、ひょっとしてあれが自警団（フォース）の証であり制服だろうかと察する。

ただ上着は丈が短く、ジャケットも前を留めていないことからへそが丸見えであった。

「お、女の人……」

「なんだい不服か？」

女という言葉は地雷だったのか、顔をしかめている。

「違う違う。女の人が来るって知らなかったから。それに美人だし」

慌てて取り繕う。実際目の前に表れた女性は身長も高く、一七〇センチにギリ届かない十樹よりも少しだけ上。胸は適度にあるようだが、モロに見えている腹部は薄っすらとながらも割れており、その影響か上から下までスマートな印象を与えてくる。
「ぶっあたしみたいなガサツなもん相手に美人とかあんた冗談が上手いね」
「あら、私もあなたは美人だと思っているわよブリトニー」
「ジェイミーさん、冗談はよしてくれ。あんたが言うと嫌味にしか思えない」
「そんなつもりはないのよ?」
やはりというべきか顔なじみなようで、楽しそうに会話を繰り広げる。
「で、だ。フレイムの奴はどうしたんだい」
唐突に会話をこちらへ向けてくるが、彼女の言う通り今ここに鈴木はいない。
「なんか用事があるから帰るって言ってたな」
ジェイミーへ視線を投げると頷いていた。
家からここまで送ってもらった、それは間違いない。ただ着くや否やジェイミーに後は任せたと投げられたのだ。
「あんにゃろ逃げやがったな」
「あーもしかしてあいつ」
何となく想像がついた。契約はしたものの辛くて逃げ出したか、もしくはシゴキが辛

すぎて顔を見ると思い出すから見たくなかったのだろう。
どちらにせよ自分を都合よく弾除け代わりに使われたようだ。
「まぁいないもんは後でしばきあげるとして、まずは貰うもん貰っとこうか」
「すずっ、フレイムに言われたけど紹介で値引きになるでよかったのか？」
「おっとそうだった。えっと幾らだったけ」
「一週間コースだから銀貨三十枚ね。今回はギルド本部を挟んでないから仲介手数料はないわ」
ジェイミーとは今日のことを話していたため、先に教えてくれた。
言われた金額を渡された袋から取り出す。
今日はシモーヌをイヴに取られたことで一緒には来てくれていないため、自分で全部やらなくてはならない。袋の紐をベルトに結んでいるだけという危なっかしい状態だったため、ヒヤヒヤしながらもここまで来たことを思い出す。
「三十枚となると多いな」
「確かに持ち運びは不便だな。頭のいい奴らは紙に書いた金額だけでやり取りしてるらしいが、あたしにはさっぱりだ」
小切手というものだろうかと疑問には思うが、生憎知識の中にはなかったようで、とりわけ必要になるとも思えずスルーすることに。

「これで契約は成立だな。あたしの名前はブリトニー・ソーンスウェイト。自警団（フォース）の所属だ。うちの名にかけて半端なことはしないから、これから一週間覚悟しとくんだね」
「あぁ。俺の名前は志島十樹（しじまとおき）だ、よろしく頼む」
決意を胸にがっしりとブリトニーと握手を交わし、努力することを胸に誓ったのだった。
この後どれだけの過酷な訓練が待っているかも知らずに。

ブリトニーと契約して三日が経った日のことだ。
二回戦目の報せが一昨日にあり、昨日勝利を納めた。そのため勝利祝などから本格的な訓練は今日からとなっている。
期間が一週間。しかも出張型ということでお互いに満足行くまでできるという特典があるのだが、今はそれが裏目に出ていると十樹は思っていた。
「いだだだだだだだ」
「何言ってるんだい。ちょっと腕を極めたくらいで」
現在絶賛腕ひしぎ十字固めをかけられており、腕が彼女の胸に触れているという本来

ならば幸せな状況下だが、痛みでそれどころではない。
教育のメイン題材は受け身の練習だが、明日は戦いもないことからたまには実戦的なことをしようと、ブリトニーからの提案に乗ったのがそもそもの間違いだった。
完璧に極められた腕は筋が伸ばされ、このままでは骨までもを折られることを容易に想像ができ、脂汗が出る。
「たんまたんまたんま。マジでこれ以上は駄目だって！」
「ったくしょうがない奴だね全く」
やっとこさ開放された右腕だったが技の影響か、曲げるのにも痛みが伴い暫し使い物にならなくなっていた。腕を地面につくこともできず、痛みを堪えながら立ち上がると、そこへブリトニーはお構いなしにパシンと手の平で叩いてくる。元々あった痛みへ追撃がやってきたことで喉が引きつり、せっかく立ったのにしゃがんで腕を抑えてしまった。
この時に叫ばなかった自分を褒めてやりたいものだ。
「あんた基本も何もできてなさすぎなのさ。体も硬いし。あるのは能闘士が貰える能力と体力だけ。それ以外は話にならないね」
「む、無茶言うな。ちょっと前まで善良な一般市民だったんだぞ」
「関係あるかい」

懸命に反論するもバッサリと切り落とされた。

どうして鈴木が敬遠していたのか何となく理解した。これは確かに逃げたくなる相手だと。

この三日で大体のことは把握していた。ブリトニーは原住民でありながら能闘士であること。能闘士ではあるがパートナーとなる神はいないこと。何よりまだ二十歳なのにとんでもなく強いことを。

原住民が能闘士となった場合、転生者と同じく神がパートナーとしてあてがわれるそうだが、能闘士の集いへ参加しない場合はあてがわれずに放置されるそうだと、先日貰った時計の辞書機能に乗っていた。

他にも原住民が能闘士には全員なれるわけではなく、転生者との混血児や隔世遺伝等がなければいけないことと。また最初からなれるわけでもなく、覚醒しなければ能力を使えるようにはならないそうだ。能力の選択はランダムだそうだが人間性に合うものが勝手に選ばれるのだとか。しかも転生者と同じく覚醒した瞬間から同等の身体能力も有するそうで、この内容を知った時には物語の主人公じゃんと思ってしまったものだ。

「体が固いのはまぁ仕方ないとして、あんた能闘士になる前は運動とかしてこなかったろ」

「なんでわかるんだ」
「そんなもん動き見ていたらわかる。元々鍛えていれば体幹ができていくから動きの無駄が減るし変にヨタヨタしない。あんたはただ与えられたものに頼りすぎてるだけ」
ぐぅの音も出なかった。
実際ブリトニーの言っていることは全て当たっているため、言い返すどころか言い訳さえできそうもない。しかも何処からどう見ても経験からくる言葉であるために、迂闊に反論してもけちょんけちょんにされて突き返されるのが目に見えていた。
「でもだ、これまで運動してないからできないだけとも言えるわけだね。重要なのはこれまでじゃなくてこれから。これからできるように成長できればいいわけさ」
追撃でやってきた言葉が凹んでいた胸に染み込んでくる辺り、諦めかけた心を再燃させるには十分だった。
「あんた人を動かすのが上手いな」
「何がだい？」
気付いてないフリとかでもなく純粋にわかっていないようだ。
こっちに来てからシモーヌで多少は慣れてきたことで、耐性ができていることから助かったが、もしなければコロッと落とされるところだった。
「いやなんでも。それよりもういっちょだ」

「なんだい潔いじゃないか」
ブリトニーは笑みを浮かべてバックステップを踏んで距離を取った。その際に一々後ろも見ず、反動も最小限に着地できている辺り自分との差をそれだけで感じ取る。
できないならば学べばいい。重要なのはそこだ。
呼吸を二度行い心を落ち着け、腰を落とし、駆け出した。
ブリトニーにこの模擬戦を行うと時に言われた言葉は二つ。自分より強者に当たるなら先手を取るか油断させたところを狙うかの二択だと。
ただ相手を油断させるのは今の十樹には至難の業。相手の誘い方も知らないため、先手必勝で立ち向かう他ないのだが、
「だぁっ」
「遅いし腰が回っていない。それじゃあ力が分散する」
殴りかかりにいっても容易に反らされてしまった。
それもそのはず。ブリトニーは幼いことから自警団にあこがれていたため、ずっと訓練を重ねてきたそうだ。自分より何年も経験しているのだから、未経験だった自分が直ぐに越えられるはずもない。
現に今も切り替えして殴りにいった左の拳を反らしてから手首を掴み、腹部へアッパーカットをきめられていた。

「――――んぶっ」

人の急所を熟知しているのか、難なくみぞおちへ拳を叩き込まれ、空中で怯んでいる十樹へ蹴りを叩き込んできた。

脇腹へ突き刺さった蹴りは問答無用に振り抜かれ、優に八メートルほど吹き飛ばされていた。

――っそ、ここだ！

痛みが体を襲いはするが、それよりも体勢を整えることに集中し、落下する前に手を折り曲げながら地面の芝生に触れ、直後に腕力だけで跳ねる。これにより重心がかわり、二度目の着地の時には足から降りることに成功し、すぐさま構える。が、ブリトニーは既に目の前まで攻め込んできており、拳を振るっていたところだった。

着地へ意識が集中していた弊害がここで出たかと思いながらも、思わず目をつむってしまう。

襲う拳の衝撃に備えて体をこわばらせたが、やってきたのは額に小さな衝撃だけだった。

恐る恐る目を開くと、目の前にはやはりブリトニーが立っており、伸ばされた腕の先は人差し指が突き出ており、自分の額を押していることがわかる。

「やるじゃん。今のは昨日今日でできるようなもんじゃないよ」

「え、何が……？」
彼女が何を言わんとしているのか、痛みと驚きでわからなかった。
「何々無我夢中だった？　まぁでもそれも悪くない。一度できたなら体が覚えるもんだからね」
頭の上に疑問符が大量に表れていたが、やや時間をあけることで自分が何をやったのかを思い出す。
――あれ、本当に俺がやったんだ……。
創作上の動きではたまに見る動きではあったが、自分がそれを再現できるとは思ってもみなかった。
両手に目を落とすと震えるのがわかる。危機を脱したという安堵からではなく、達成感という名の震えだ。
ゆっくりと握りしめて噛み締めた。
「おし、今のができるなら受け身の練習も再開しようか。もっと上手くなるぞ」
しかしゆっくりと満足感には浸らせてはくれず、早速訓練は開始された。
この日から更に三日が過ぎ、遂にブロック最終戦の日が決定された。

第四章一幕　人の心神の心

最終戦前日の夜。
明日は朝から対戦が決定されており、前祝いとしてこちらの世界で知り合った人たちが集まってくれた。
シモーヌ、ジェイミー、鈴木、サイス、ブリトニー。
鈴木は昨日最終戦だったそうで、なんとか一勝は勝ち取れたそうだ。
そのためこの席は半分鈴木の戦勝会も兼ねていた。
「うふふー、とおきー、のんでるー」
「おま、鈴木酒臭いぞ」
「おれはー、ハタチだからもんだーい、ありませぇん！」
どうでもいい情報と一緒に肩を捕まれ、逃さないようにしてきた。いつもしているフードは降ろされ、イヤホンも首にかけた状態で絡んでくる。
明日が明日でなければ多少は付き合えたのだが、今はただただ鬱陶しいだけ。
「そーだぞ。十樹も飲も飲も」
「いやいや、ブリトニーだって今日はほどほどにして寝とけって言ってたろ」

「えーそんなこといったっけーっヒック。あー、もしかして年齢のこと気にしてるー？
ここじゃあ十八歳じゃあないと飲めないからってー」
「え、そうなのか？　ならギリ飲めるな」
そこまで言ってしまったと口に手をやったが既に遅かった。
「んふふー。聞いたかフレイムー」
「あぁきいたともさまどもあぜる。これはのますしかないなー」
左右をがっしり捕まれ、逃げ場を失った状態で無理矢理飲ましに来た。
「はいはい二人共その辺にね。それにブリトニーは人に迷惑かけているようじゃ自警団失格でしょ」
しかしそこへジェイミーの助け舟が入る。
二人はぶーたれつつもすごすごと離れ、仲良く酒を酌み交わしていた。先日鈴木がブリトニーから逃げたのが嘘のようである。
絡み酒の人間から開放されたことで、改めてジェイミーへ礼を言おうとすると、何故かすり寄ってきていた。
「ねぇ、おじゃま虫もいなくなったことだしぃ」
しかも口は徐々に上がってき、頬を舐めるように唇が進むと、最後には耳元で囁いてきた。

「二人でどっかに出かけない？」
途端に背筋へ電流が走る。イヴのイタズラとか静電気などではなく、ジェイミーの色気によって発生させられたものだった。
腕に胸を押し当て、何か香水を使っているのか酒に混じっていい匂いがしており、頭がクラクラし始める。
このままではいけないと座り直そうと小さく動くと、腕にあたっていた柔い感触が、より深く感じられ、
「あん。もう、積極的ね」
甘い声にのぼせ上がる思いだった。
自分が赤面していたのは知っているが、今は実際に燃えているんじゃないかと思う程度には顔全体が熱かった。吐息の感じる耳と腕には全神経を集中しており、背中を走るゾクゾク感は、得も言えぬ快感。
この後どうなるんだろうと妄想し、目線が一度胸元へ行くも、即座に反らしてさまよう。すると別の人と目がかち合った。
「し、シモーヌっ。あの、これは……」
「十樹さんっておモテになるんですね」
これまで聞いたこともない冷ややかな物言いに、胸の感触だとか耳の吐息だとか、全

部吹き飛んでしまった。
「ち、違うんだ。俺は別に」
　何が違うのか十樹自身知らない。
　浮気現場を見られた人がつい口にしてしまうようなフレーズを、まさか自分で言うことになるとは思いもしなかったが、意外と自然に出るものなんだなと、頭の何処かだけは冷静に考えていた。
「へえ、どのへんがですか。ジェイミーさんにデレデレして」
「あら～シモーヌのヤキモチ？　可愛いけどでもざーんねん。十樹は私が貰うわ」
「ジェイミーさんもジェイミーさんです！　それに貰うだなんて、十樹さんは物じゃありません！」
「ならシモーヌのものでもないでしょ？　だったら私と一緒にいてもシモーヌが怒る権利はないんじゃないかしら」
「あ、あります。私にだって権利が」
　何を根拠に言ってるのか、シモーヌらしからぬムキのなりように、小さな違和感を覚えた。それが何なのかを知る前に、シモーヌは叫ぶ。
「私は十樹さんのサポートです。身の回りのお世話は私がするんです。私だけなんです！」

「あらあらお熱いわね。これは私は退散しなくちゃいけないかしら」
　そういってジェイミーは残念そうな顔をしてから頬にキスをして離れていった。
「ジェイミーさん！」
「頬だけよ。口にはしてないから安心して」
　シモーヌらしなからぬ目線。ジト目でジェイミーを牽制している辺りらしくなかった。自分以外は全員お酒を飲んでいるが、流石に異常だった。
「十樹さんっ」
「は、はい！」
　とはいえ普段聞き慣れないシモーヌの強い口調は思考を吹っ飛ばすには十分で、簡単に塗りつぶされてしまった。
「ここ、座ってください」
「なんでだ？」
「いいから早く！」
　強い口調だが、イヴほど気迫は感じられない。だというのに言うことを聞かなければならないと思うのは何故だろうか。
「座ったけどどうするんだ」
「こっちに頭を倒してください」

どうやってと言うよりも先に、頭を捕まれ無理矢理に倒されてしまった。
「あ、あの～シモーヌさん。これは所謂膝枕と言うやつでは……？」
少々強引ではあったが、今シモーヌにやられているのは紛れもなく膝枕だった。左側頭部へ伝わる柔らかい太ももの感触。酒の影響で温まった体温。シモーヌの柔らかいオレンジのような香り。
これはまるで夢のようだ。
先程まで怒っていたシモーヌの顔も穏やかとなり、優しく頭を撫でてくれた。
他所は騒がしいのに、どこか遠くに聞こえてくるくらいには安心し、徐々に瞼が重くなっていきかけ、無理矢理起き上がった。
「え、嫌でしたか……」
シモーヌは悲しそうに視線を向けてくる。
何か落ち度があったろうかと探しているのだろう。だが、シモーヌには何もない。あるのは自分ともう一人の存在だ。
「ありがとうシモーヌ。よかったらまたやってくれ」
そう言い残し、十樹は急いで家から出ていった。
開け放たれた戸の先は大通りからはずれているため、夜になると不気味なくらいには薄暗く、何も見えなかった。

しかしいることだけはわかる。
「イヴ、いるんだろ」
「あら、せっかく幸せな時間だったでしょうに、もういいの」
「あれ、お前の仕業だろ」
「仕業とはご挨拶ね。あんたに気を使ったのよ。幸せなまま眠れたほうが翌日のパフォーマンスがいいんだから」
「そりゃどうも。危うくもう少しで寝るところだったよ。あ、いや、シモーヌの膝枕だからぐっすり眠れただろうけど」
「そういうデリカシーのないところが童貞よね」
「い、今は関係ないだろ！　それにお前には言われたくないぞ」
どの辺がデリカシーに欠ける発言だったかはわからないが、少なくともイヴとて人の言われたくないことを、ペラペラと話すのだから百歩譲ってもお互い様のはずである。だというのに、イヴは重い溜息を吐いて哀れみの目を向けてきた。
「あんたはそれだから彼女の一人もできないのよ」
普段はなじってくるような言い方なのに、今日は哀れみの目で見てくるため、同じような言葉なのに胸にあるのは苛立ちよりも焦りだった。そんなに自分は駄目な反応をしたのだろうかと。

「ま、この世界じゃこれからも女絡みの話は出るだろうから、そこで学びなさい」
「偉い上から目線だな」
「女神だもの」
「そうだった」
　暫しの沈黙。
　夜なこともあってややひんやりする空気ではあったが、幸いシモーヌのくれた衣服のおかげで殆ど寒さは感じられない。だが、隣を見るとイヴはずっとヴェールのような衣服で佇んでいる。正直寒くないのかと心配になるほどに。肌は陶器のように白く艶やかで、穢れは一つもない。嫌味なしに美しい姿をしていた。
　故に意を決し尋ねてみようと口を開いたところで、
「なぁ」「ねぇ」
　綺麗にブッキングしてしまった。
「お前からどうぞ」
「あんたから言えば」
「お前――――いや時間の無駄だな……なぁ、イヴ。お前寒くはないか」
「何かと思えばそんなことか。お生憎だけど私は寒さも暑さとも無縁よ。どうせこの見た目のことで言ってるのは目に見えているけど、あんた不思議には思わなかった？　シ

モーヌがあんたの服には口出ししたのに私にはしなかったことを」
「言われてみれば……」
「あれは私の衣服がその世界に合わせて見えるようにできてるのよ。ま、あんたが私の他の格好を見てみたいって言うんならたまには変えてやるわ。気が向いたらだけど」
「そうだな、是非見たいからそのうち見せてくれ」
正直な感想だった。
イヴが普通な女の子の格好をしたらそれはさぞかし可愛いことだろう。素材は良いのだから間違いないはずだ。だというのに当人はパチクリと目をしばたかせているだけだった。
「……あんたそのうち女泣かせそうね」
「なんでそういう話になったよ」
「女神の勘よ」
「女と神両方の勘ってわけか、そいつは凄そうだ」
息を吐きだしながら空を見上げる。
明かりが殆どないことから月が出ているが星も見えており、実に綺麗な夜空だった。
「最近はどう。この世界には慣れた？」
空を眺めているとイヴが切り出してくる。

「そうだな、正直まだだと思う。これからも一杯驚くことはあるだろうし、学ぶことも多そうだ」
「そう」
「でもお前がいてくれたおかげで助かったよ。鈴木に聞いたけどサイスは家は作れるけど内装とか好き勝手いじれないんだってな。電気もガスも水道もうちはあるけど、向こうはないそうだし」
「少しは私のことを敬う気にはなった？」
「あぁ。出会いはあまり褒められたもんじゃなかったけど、でも助けられているのも事実だしな」
「それでいいのよ」
そう言ったっきりイヴは黙り込み口を開くことはない。でも何となくわかった。今の内容が話したかったものではないことに。
イヴが隠し事を幾つかしているのもわかる。何に対してと言われると困るし、具体的に説明しろと投げかけられても勘としか言いようがない。
だからといって信用がないわけではない。
話せないことなんて誰でもあるのだから。しかもイヴは神だ。人間では踏み込めない領域の話もあるだろう。

だけど、
「で、カグヤの件は話す気になったか」
聞かなければ何もわからない。
今度話すと言われて以来、イヴからカグヤのことを口にすることは一度たりともなく、気配もなかった。
「目ざといわねあんた」
だからこそもし話す気になるならばこの瞬間だろうと思い切り出したが、どうやら正解だったようだ。
「ええそうよ、カグヤの件。と言ってもあんたに言えることなんて高々知れてるけどね」
神でもストレスは溜まるんじゃないのかと口を挟みかけたが、今はじっとこらえて次を待つ。
「……あのくそ女には借りがあるのよ。私の個人的な借りがね。でもあんたを巻き込むつもりはないから安心しなさい」
「巻き込むも何も既に巻き込まれてるだろ。だってそいつが転生させたやつと明日戦うんだぜ」
「言われてみればそうね、悪かったわ――――何その顔」
失礼なのは承知だが、イヴが素直に謝ってきたことが意外すぎて驚いてしまった。シ

モーヌに諭されてならばまだわかるがここにはいない。完璧にイヴが謝ろうとして出た謝罪の言葉なのだから驚かないはずはなかった。
「すまん。ちょっと予想外過ぎた」
「はぁ、あんた聞く気はあんの」
「だよな。悪かった」
　一度居住まいを但し、イヴの言葉に耳を傾けた。
「カグヤは月の神。地球の衛星だからあいつも私の配下だけど、その中でも高位に立つ存在でね、まぁことある事に私に楯突く存在なのよ」
「怖いもの知らずだな」
「周りからも同じこと言われてたけど止めなかったのよ、あいつは。まぁ私もイジメがいがあって楽しかったからつい構ってやってたのよね。そしたらなんやかんやあって、気付いたらこんなところに来る羽目になったわけ」
「なんやかんやってアバウトだなおい」
「そこは私のプライベートなことだから無理」
「人のことは知ってるくせになんだよそれ……」
　唇を尖らせ、無駄とは知りつつもわざとらしく不機嫌に見せてみる。それが面白かったのか、イヴは愉快そうに見てくる。

「ま、わざわざ私がこの世界に来た理由はカグヤにあるってことよ」
「だろうな。だってお前強くなる必要ないのに来てるんだしおかしいとは思ってたんだ」
イヴは前に言っていた。私はもう強くなりすぎていると。これ以上のレベルは上がらないと。そして神が転生させるのはレベル上げをするため。
ならばなんでと思ってはいたが、カグヤのことを聞いてある程度把握できた。内容までは知らないが、追いかけてこなければいけないほど、イヴにとって重要なことなのだと。
「あんた落ち着いてる時だけは頭が働くわね。全環境下でもそうできるようにしたら？結構武器になるものよ。特にあんたの能力を考えたら」
「確かに時を止めるだとか動かすタイミングを緻密に考えれば、生命力の消費も少なくて済むし試す価値はあるけど、もっと戦闘経験がないと難しいな」
「最初はさっさと戦いたいとか言ってたやつの発言とは思えないわ」
「言うな。それは俺も若干後悔してるんだから……」
粋がっていた頃の自分をぶん殴りたい。
ハッキリ言えば時を止める能力と時を動かす能力があれば大体の相手は倒せるだろう。しかし能力には使える時間に制限があり、今の十樹には万全な状態でも十六秒が

精々だ。それ以降は問答無用で倒れてしまうから調整が必須で、最強には程遠かった。
イヴ曰く時間への干渉は実際最強クラスだそうだが、それに至るには自分の力が足りないのと、人間でそこまでのことをやるにはほぼ不可能だそうだ。
――ごく普通な時間という概念に縛られる人じゃできない、か。まぁそれ以前に生命力が保たないとか言われたっけ。
言葉が抽象的すぎて何を言わんとしているのかサッパリだったが、少なくともっと鍛錬すれば強くなれると太鼓判を押されていることは間違いないため、まずは明日の戦いに勝つことを胸に誓った。
「そろそろあんたも休みなさい。休息は生物にとって必須な行動よ」
「寝不足の結果負けましたじゃ格好がつかないしな」
自室に戻って寝るかと思い戸を開いた瞬間、ダイニングの方から大きな声が上がっていた。
「俺はこの世界で生きていく、ずっと。お前を守りゆく、きっと」
「悪いけどー。あたしは軟弱な男はきらいよー」
「フレイムは僕何かと違って強いんだぞ。馬鹿にするな！」
「ねぇシモーヌ。私がアタックしてもいいでしょ」
「だめれす。それはいけましぇん！」

最早かしましいなんてレベルは超えて、騒音と化していた。
「そういやあれ、お前の仕業だったな」
「あんたの息抜きになるかと思って酒を飲んだら変わるように調整しておいたのよ。どうせあんたは意気地なしだから飲まないだろうし。ただちょーっと加減ミスったようね」
「危ない薬とかじゃ」
「なわけないでしょ。ちょっと気持ちがハイになるようにしたのと、あんたに意識を向きやすくしてるだけよ。ここにいる女は上玉なんだし嬉しいでしょ？」
「過激すぎて心臓に悪かったわ！」
「これだから童貞は。その程度捌けないようじゃ暫く彼女の一人も作れそうにないわ」
諸悪の根源はイヴではあったが、事実持て余していただけに言い返す言葉は思い浮かばず、イヴが指を弾いたことで騒がしさが落ち着いたことに安堵だけした。
「もういい時間だしそろそろお開くよ」
イヴの声を耳にしながらも自室へと退避する。虎穴に入る理由などないからだ。
ベッドで横になると睡魔が隠れていたのか、一気にやってくる。
もう少し明日の作戦を見直したい気もするが眠気には抗えそうもなく、大人しく微睡みの世界へと落ちていった。

第四章二幕　女神カグヤ

「後五分もしないうちに転送開始よ。準備はいいの」
いつものようにダイニングでお茶をしながら来たるべき時を待っていた。
今日は他のメンツはいない。邪魔をしたら悪いからと顔見せしただけで直ぐに帰っていったからだ。
「ここに来て慌ててもしょうがないだろうしな。えっと万事塞翁が馬って奴だ」
嘘だ。三度目であるためある程度はマシではあるが、緊張は消えていない。相手の神はイヴに関わりがあると知っているだけに、尚更半端なことはできないと自分で追い込んでしまっているが、こればっかりは性分なようで回避しようがなかった。
「あのー、もしかして人事を尽くして天命を待つ、でしょうか」
「……そ、そうともいうかもしれないな」
完璧に言い間違いをしてしまい、恥ずかしい事この上ない。赤面してしまっているのが顔に触れなくてもわかるくらいには熱く、格好つけて言わなければよかったと試合前から後悔していた。
シモーヌが日本のことわざを知っているのは、転生者側の出身に合わせて届いた言葉

が変換されるというシステムがあるためだ。ためではあるが、やはり恥ずかしいものは恥ずかしいのである。

「そうとしか言わないのよマヌケ。本当に大丈夫かしら」

疑いの目をイヴに向けられるが、こればっかりは自分のせいであるため否定できる要素はない。

二日酔いなどはないのか、シモーヌは昨夜のような積極的な行動はないものの、笑みを浮かべており、こっ恥ずかしさは尚更加速するが、彼女の笑顔に元気も貰っているためプラスとマイナスで帳消しだと思うよう心がける。

「じ、人事は尽くしたんだしいいだろっ」

「はい。十樹さんは大変努力されました」

「そうお？　人事を尽くすほど努力してたようには見えなかったけど。ブリトニーのおっぱいに触れてたまににやけてたくらいよこの変態」

「ば、俺から触ったみたいに言うな！　ち、違うからなシモーヌ。たまたま触れることがあっただけで別にやましい感情で触ったわけじゃ」

まだ戦いも始まっていないのに唐突に襲われた寒気に、反射でシモーヌへ謝罪を並べる。どうしてかはわからない。でも言わなくてはならない衝動にかられていた。

「へぇ、十樹さんそんなことをされていたんですね」

シモーヌはあいも変わらず笑みは浮かべてくれている。でもその目は酷く冷めており、ひょっとしてまだ酒が抜けていないのではと勘ぐるほどに、今日まで見たことのない顔をしていた。

「だから違うだって」

「そうね。わざとコケるように見せかけておっぱいを鷲掴みもしてたわ。しかもその夜に――――」

「だーもー黙れよこのくそ女神！」

年齢イコール交際経験無し。それも初めて胸を揉んでしまったのだ。年頃の男としてそれだけは仕方のないことだ。だというのにそれを気になる女の子の前でバラされるとか拷問以外のなんだというのだ。しかも言った本人は愉快そうにしている辺り、実に悪魔的でお似合いだった。

「十樹さんって軟派なんですね。知りませんでした。そういえばジェイミーさんとも」

「本当に悪気はなかったんだ。偶然な産物で故意にやったわけじゃ――――」

「ふふ、ふふふふ」

「シモーヌ？」

テンパって言い訳を並べていると、シモーヌがいきなり口元に手を当てて笑い出した。

「ぶはっこいつまだ気付いてないでやんの。あーははははははは」
「イヴも何、が……まさか！」
「はい。十樹さんがそんなことを狙ってする方だとは思っていませんよ。でも、ふふふ、あんなに一生懸命弁解をなされるからつい可笑しくって、すみません」
謝罪はするも、笑いのツボは刺激されたままなのか、シモーヌは笑ってしまうのを懸命にこらえているのが見ていてわかる。イヴは隠すことなく笑っているが。
「……んだよ二人して。これからって時に人を弄り倒して……」
せっかく自分は戦いを目前にしても落ち着いているのだと思い込もうとしていたのに、これでは落ち着く以前の問題だ。しかし、
「でも緊張は解れたでしょ」
「起きてからずっと気を張っておられましたから」
「イヴ、シモーヌ……」
二人は自分事を気遣ってのからかいだったようだ。事実心の中にあった重圧は消え失せ、鼓動も穏やかだった。
「そういうことなら早く言えよ」
緊張しているところに人の優しさに触れたことで思わず泣きそうになる。周りの温かさをこれまで受けたことが果たしてあっただろうか。

――あぁでも発表会の前に友人に馬鹿話されて緊張が解れたこととかあったっけか。
懐かしい記憶を掘り起こした気分になるが、もう戻れない過去を思っても仕方ないと割り切る。
「すみません十樹さん。イヴ様がどうしてもとおっしゃるもので」
「口で言ってもこいつは無理よ。変に理屈っぽいから。だからこういうサプライズの方が効果抜群なのよ。もしシモーヌもその気があるなら不意打ちの方がこいつは流されやすいわよ」
「な、ななな、何を仰るんですかイヴ様！」
「あーら何でしょうね」
人に優しさをくれたかと思えば置いてけぼりにし、忙しい二人だとつくづく思う。
これで勝てれば賞金が金貨百枚。もし負けたら金貨は二十五枚。
シモーヌの給料のためにも是が非でも勝ちたい一戦である。
「そろそろ時間だな」
手首に巻いた腕時計で時間を確認すると、午前九時の十秒前だった。
「十樹さん頑張ってください。私も頑張って応援しますね」
「カグヤのことはいいから、あんたは戦うことだけ考えなさい」
頷くと同時に周囲の景色は変わり、視界が広がる。

「あれ、ここって……」

過去二度の戦いは見たこともない路地裏だとか通りだったはずが、今回は見覚えがあった。何度かそこを通っているため間違いない。

「ギルド本部がある広場、だよな」

「はい……そのようですね」

シモーヌも同意しているのだからまず間違いはないだろう。ギルド本部がある広場は広く円形に作られている。直線距離でも五十メートルはあり、中央には噴水がある。なんでもその噴水がエルシドの町の真ん中を示しているのだとか。そこから十字に広い道が伸びているが、そこには今は人だかりができていた。

「言ったでしょ。能闘士（サバト）の集（トい）いが行われるのは実際この世界にある場所を参考に創られているって」

そうだったと思い出す。能闘士（サバト）の集（トい）いで転移した先はこの星にある場所をベースに、専用に作られた別の小さな世界（はこにわ）なのだとか。そのため元々の世界には影響がなく、観客以外は普段どおりの生活を行っているそうなのだが、今日はやけに多かった。

「ど忘れしてた。というか観客多すぎないか？」

周囲を見渡せば人だらけ。二度の戦いで見た数の優に十倍はいるのではと錯覚するほどに。

建物内も満室らしく、一人の少女と目があい手を振られもした。そのようなアクションはこれまで経験はないためドギマギする。
「あぁそのことね。これが今回の最終戦は知っての通りだけど、あんたと相手でどちらも二勝してる。ここまで言えばわかるでしょ」
「これで一番強い人がわかるんですね」
「最終戦であり決勝戦ってわけか」
「そういうこと。おかげで規定通りの報酬も期待できるわけ。しかも注目されているから今後依頼を受けるようになるなら、ここほどアピールする場所はない。ちっとは気合入った?」
「おかげさまでまた緊張してきたよ」
「軽口がきけるなら上等」
実際本当に緊張がぶり返してきたのだが、虚勢だけは何とか張れた。
「久しぶりねイヴ。まさか本当に追いかけてくるだなんて」
そうこうしている内に相手方も来たのか話しかけてきた。
聞こえた方へ視線を向けると、そこには神と思しき存在がいた。
イヴと同じ長いブロンドヘアーを垂らし、その間から白いウサギの耳が空に向かって伸びている。衣服は重ね着をした着物を着崩しているのか、豊満な胸をこれでもかと見

せつけていた。
「えぇ来てやったわこんなところまでね。どっかの誰かさんがクソ面倒くさいことをやらかすから」
「人のせいにするとか、これが元私の上役だったなんて臍で茶が沸くわ」
——想像通りの関係だな……。
想定はしていたが、やはりイヴとカグヤは犬猿の仲なのか、顔を見るなり毒を吐き合う。
「黙れ絞めて皮剥ぐぞ」
パチンといつものように指を弾いたイヴだが、カグヤは涼しい顔をしており、続いてしたり顔を浮かべていた。
「あーらこの女神は今の自分の実力もわかっていないご様子。これは傑作ね」
「ちっ、このくそアマが、調子に乗るなよ」
これまで見たこともない怒りを顕にするイヴ。眉間にシワが寄っており、歯を見せるほどに食いしばっている。
——前言撤回だ。想像以上のようだ。それよりももしかしてカグヤにはイヴの力が効かないのか？　でもイヴの方が格上で……。
そこまで考えてカグヤの元、という言葉を思い出し、尋ねようとしたところで邪魔が

入った。
「カグヤ。べらべら喋るな」
「ご、ごめんなさいトゥーレ」
カグヤの前に出てきたのは一人の男だった。鈴木に聞いてはいたが、情報通り自分より少し下のように見える。身長も一六〇センチ台だろうか、低く見えるが、それよりも重要なのは見た目だった。
生まれつきだろうか、白い髪にやや切れ目の長い目をしているが、顔立ちがいいだけに威圧感よりも格好良さが前に押し出されている。格好はこの世界には合わせておらず、制服なのか上下真っ黒の服を着ていた。上着は前がファスナーなようだが、しっかりと上まで上げている辺り真面目なのだろうか。
「たく、お前は何故いつも僕の前に立つ。従者はお前だろうが」
「そ、そんなつもりはないのよ。あの女があんまり無様だったから」
「無様なのは貴様だこの豚が」
しかし見た目とは裏腹に中々に毒を吐いている。しかも気のせいだろうか、言われた側であるカグヤの方は喜んでいるようにも見える。
おまけに神であるカグヤがトゥーレと呼ばれた男に傅いているとしか思えないやり取りはどういうことなのだろうか。

「なぁイヴ」
「黙れ私から言うことは何もない」
まだご立腹な様子で、噛み付くようにカグヤを睨んでいるだけで視線すらこちらに向けることはない。
「ふふ、人間相手に当たるとかこれがかつて最上位の神とは思えないわ」
「誰が喋っていいと言った」
「ごめんなさい……」
睨みつけて黙らせている辺り、上下関係がメチャクチャだ。
――どういうことなんだ？　どう足掻いても神のほうが上だろうに。というかかつてって言ったか。さっきから過去形が多すぎるな。でも……。
イヴに尋ねたかったがどうやら聞いてくれるような状態ではなく、致し方なく事情を知っているカグヤに聞くことにした。
「なぁ、あんた月の女神カグヤなんだろ」
「はぁ？　人間ごときが何タメ口でえっらそうに話しかけてきてるの。消すわよ」
――イヴそっくりな物言いだな。見た目も近いし双子なんじゃないのか？
一卵性ほどは似てないものの、二卵性と言われたら思わず納得してしまうくらいには近寄っていた。おかげで恐れを抱くよりも懐かしさに思わず頬を緩めてしまう。

「ちょっと止めてよそいつと肉親みたいな扱いしないでキモすぎ。しかもその顔、童貞臭すぎるわ」
「童貞は関係ないだろ！」
油断すればこれだ。
――人の心をずけずけと読んでくるわ童貞だとけなしてくるわ、やってることは一緒じゃねーか。
読心されていることをいいことにあえて口にせずに言ってやった。やはりと言うべきか、イヴよりは単純なのか容易に誘いに乗ってくる。
「だから一緒にするな。いい加減その口塞いでやろうかしら」
「黙るのはお前だカグヤ」
「でもあいつが私のことを」
「僕は黙れと言ったんだ。それに聞いていればなんだ。人間如きと言ったか？　つまり僕にもそういう態度を取るわけか」
「ち、違うのよ。私はあの童貞にだけ言っただけで」
「ほお、奇遇だな、僕も童貞だ。つまりお前は僕にはそう言いたいわけだな」
「そんなつもりはないのよ。トゥーレにそんなこと言うわけないじゃない。それに初めてなら私が相手になっても」

「お前を相手にするとでも思っているのか？　少しは自分の鏡で見ることだな。あぁ言わなくてはわからないかそうだよな。神でも人でも客観視というのはできないらしい。お前みたいな痴女じみた格好をしているやつを誰が好む」
「えぇ、だってこれはトゥーレがこういう格好が好きだからって」
「一言も言わなかったぞ。お前が着ているのが馬鹿みたいで面白いからそうしろと言っただけだ」
「そ、そんな～……」
　何の漫才をしているのかわからないが、少なくともカグヤはあのトゥーレという男のことにゾッコンのようだ。しかし完全に遊ばれているのが十樹ですらわかるほどに酷かった。カグヤは薄っすら涙目になっている辺り、その手のに弱い十樹は気になって仕方がなかった。
「やるわ、あいつ」
　険しい顔こそあまり変わらないが、イヴも感心していた。
「中々にいいサディストの才能を持っているようね。思わず私が感心してしまったわ」
「なんだそのどうしようもない才能は」
「あら有益よ。ふん、見てみなさいあのカグヤの顔を」
　言われてカグヤを見てみると、

「お前のセンスは壊滅的だな。今回の戦いが終わったら見繕ってやるから感謝しろ」
「えええぇ、楽しみにしてるわ」
少し前に涙目を浮かべていたカグヤは満面の笑みを浮かべており、実に体の良いおもちゃと化していた。
「貶しながらも相手が欲しいところしっかり拾っている。これは天才だわ」
「お前何感心してるんだよ。これから戦う相手だぞ」
「……わかってるわよ」
イヴが気を取り戻したところで向こうも落ち着いたようだ。

第四章三幕　時を動かす能力の新たな可能性

「あなたが対戦相手か。僕の名前はトゥーレ・ソリヤ。国籍は違うが日本で育ったから日本語は堪能だ。もっともこの世界じゃ意味ないそうだが」
「俺は志島十樹。見た通り生まれも育ちも日本だ。お互い変なところで出会ったもんだな」
　ニヤリと笑ってみせるが、トゥーレは反応を示さず表情を変えることがない。どころか今日出会ってから一度も変わっていないのではなかろうか。
　無表情かと言われると違うのだが、感情の起伏は浅いようだ。
「いつまでもこのままじゃ観客も冷めるからさっさと始めるわよ、クソカグヤ」
「それはこっちの台詞よ、駄女神イヴ」
　口を開けば口論しかしないのかと辟易するが、それも戦闘さえ始まれば関係ない。
　今か今かと待っていると、イヴとカグヤが互いにピストルのような構えをする。ついに始まるかと合図を待っていると、どうも様子がおかしい。
「十樹、いくわよ！」
「トゥーレ、衝撃に気をつけて！」

どういうことだと思うよりも先に両女神は指先から発光体を放った。これまで見たのはしっかり視線で追えるような速度で飛翔し中央でぶつかるのだが、今回のは放たれたと思った瞬間には衝突したらしい。らしいというのはまばゆい発光と衝撃で思わず目を瞑ってしまったため、何もわからなくなっていたからだ。

「こなくそっ」

発光がやんだ瞬間を狙い十樹は先手必勝として時を止め、トゥーレが立っていたところへ走っていく。視界は強烈な明かりで見えてはいなかったが、時間が止まっている間ならば相手からの反撃もないため戻る瞬間まで待てばいい。

時間に制限はあるが、それでも十分に時間はあるのだ。

鈴木曰くまともに戦うこともできずに倒されたそうだから油断できる相手ではない。速攻で決めるべき相手だ。

だというのにこれはどういうことだろうか。

「ぐふっ」

気付いた時には倒れ伏してしまい、気が散ったことで思わず時間停止の能力まで解いてしまった。

「なんだ、この重さ、は」

訳もわからない間に地面に這いつくばっている自分に驚きを隠せない。しかも起き

上がろうとすると何かに押しつぶされるような感覚に襲われ、立ち上がることができない。

軽く周囲を目配せし、近くに誰もいないことを確認し、今度は全身に力を込めて踏ん張りながらやると何とか立てたが、体が重いことは変わらない。

「十樹その場から直ぐに離れなさい」

イヴの叫び声に反応して後ろへ一メートルも移動しない内にふっと体が軽くなり、反動で転びそうになりたたらを踏む。

「なんだこれ、能力か」

「上を見なさい」

言われるがままに空を見ると、そこにはトゥーレとカグヤがいた。足場も何もない中空に。カグヤは神なのだからその程度のことはできるのだろう。だがトゥーレはどういうことだ。

「風……いや違う……さっきのはもしかして重力か!?」

「へぇ、そいつ馬鹿そうに見えて頭は回るようね」

ひょっとしてと思い口にしたことなのだが、ご丁寧にカグヤが答えを教えてくれたおかげで種が完全に割れてしまった。

「馬鹿はお前だ。何故能力を教える」

「え、だって答えてたし」
「予測で言っただけかもしれないだろう。神と言いながらその程度もわからないのかこのマヌケ。どれだけ僕の足を引っ張れば済むんだ」
「ごめん、なさい……」
「ふん、まぁいい。あの人の能力もおおよそ予測がついた。高速移動か瞬間移動と言いたいところだが、それならここまですぐにやって来れるのにしない。ということは考えられるとしたら限定的な、それこそピンポインとなワープ。ただ能力に反応するならこれも違うし、マーカー等をつけるタイプの可能性もあるが、そこまで複雑な能力にする理由はない」
　一つ一つ能力の可能性を探り、潰していく。実際そのどちらかがあれば今トゥーレがいる上空七メートルまで届くだろう。だが生憎と違う。予測が付く前にどうにかしようと周囲を見回しても、建物の上に乗ったところでギリギリ届きそうもないだけに気持ちだけが逸る。
「となると考えられるのは時間を停止させている、か」
　ギクリと思わず動きを止めた。不要なことを口にすればばれる可能性がある。これはあくまでも予測にすぎないのだから。
　しかしその考えが甘かった。

「そうか本当に時間を止めているのか」
「どうしてわかっ」
言いかけしまったと口を塞ぐ。それこそが狙いだったと思ってのことだったが違ったようだ。
「安心していい、その前からわかっていたから。あなたが能力のことを口にしたらあからさまに動揺して動きを止めたから当たりが付いただけだ」
何でもないように言ってくるが、頭の回転が早すぎやしないだろうか。しかも戦いを告げる合図の中、的確に能力を使用して道を塞いでいたりと、一筋縄で行きそうにない。
先程解除されてしまったからいいものの、それでもすでに一〇秒は使ってしまっている。同時使用ならば残り六秒程度しか保たないのにどうやって攻略するべきか。
「時間を止めるだけなら大したことはない。連続して使っている節もないことを考えると使える時間も短いようだ」
制限時間がどれくらいかバレるのもそう長くはなさそうだが、かといって無理に跳んだところで重力で叩き落されるのが関の山だ。そもそもまだ五メートルも跳べないのだから物理的に届かない。
――残された手段って、相手が能力を過剰に使用して倒れるのを待つしかなくないか？

よく見ればトゥーレの周囲は重力が違うのか風景が歪んでいるようにも見える。それがマジックならお手上げだが、能力であるならチャンスは十分にある。

「へぇ、闇雲には狙ってこないか。となるとお互い狙っていることは同じになるからどう動くべきかな」

口では悩む素振りを見せながら能力を使ってきたのだろう、再び体にずっしりと重くのしかかる感覚に襲われ、即座に飛び退く。

そこから五回ほど跳ねて停止し、トゥーレを見やると拍手を送ってきた。

「いやはや回避して安堵したところをと思ったけど全部避けられたか。意外と実戦慣れもしてる感じだねこれは」

正直体が勝手に動いただけだ。考えてのことではない。

ブリトニーとの実戦形式で何度かやった時に、一度回避できても二度目三度目と追撃がやってきたのを避けるよう、繰り返していたのを体が覚えていただけだ。

軍隊の反復練習とかがどう役に立つのか不思議ではあったが、存外体というのはこういう時に染み付いた物が出るものなのだろうと、土壇場で学んでしまった。

しかし遊ばれていることに変わりはない。相手は射程内でこちらは射程外。距離すら詰めさせてくれないのだから現状打つ手なしだ。

「こっちはまだ余裕はあるけど有限だし、のんびりやるのは得策ではないかな」

これまでずっと突っ立っているような状態だったトゥーレは初めて動く。手を左右開き、前に差し出した。まるで十樹を招き入れるかのようなポーズで。

どういうことだと思った瞬間、ざわりと背筋に寒気が走る。

直感を信じて前転していると、トゥーレは手をパンッと音を立てて閉じた。十樹は前方に回避行動を取るも、足先に何かが触れたのか激しい痛みに襲われる。

「がぁっ」

「初見で今のを避けたか。でも遅い」

痛みに堪えつつももう一度ジャンプしようとしたが、足の痛みで動きが鈍り、トゥーレが下から上へと腕を振り上げると途端に上空へと飛ばされていた。

「あなたならもう察しがついているかな？　重力の操作は何も上からだけじゃないと」

――そんなこと考える暇があるかよ！

言い返す暇もなく空に吹き飛ばされる。

足が地についていないことがこれほど不安を誘うことを今更ながら気づく。イヴにやられた時はまだ原理がわからず混乱しかしていなかった。でも今は違う。明確に相手がこちらを傷つけようとしていることを理解しているだけに、恐怖心が加速する。

だが好機でもあった。

今十樹の飛ばされている軌道が、回避の反動でかトゥーレへと向いていた。このまま

いけばしがみついて地上へ落とすことができるのではなかろうか。
丁度頂点に達したのか、徐々に落下を始めている。
――悩む時間はない、か。
ギリギリまで引っ張りたい衝動に駆られたが、重力を張られてしまうと元も子もない。腹をくくり、ここが決め時だと時を止める能力と時を動かす能力を同時使用する。
全てが停止した世界。
その中でも重力は相変わらず仕事をしており、自由落下は止められそうもない。
しかも想定通りトゥーレがいる場所へ落ちていっているのだから、最高に都合が良かった。
「もらったへぶっ」
だが相手は一枚上手だったようだ。
掴みに行った直前で十樹の体は弾かれ、後方へと飛ばされる。能力は解除されたことで静寂だった空間は再び歓声の中へと戻る。
何度も練習してきた受け身だが、これだけ高く下が石畳では意味ないだろうと、無理に足から着地を試みた。が、まだ足の先が痛いのか手をついたところで、三度目の重力が上から潰さんとのしかかってくる。
「がっ、くぅっ」

「時を止める能力か。中々に興味深いね。でもやはり時が止まった世界でも重力には逆らえないか。まぁでなければ空も飛べるだろうし、それ以前に窒息死してもおかしくないのだから。となると今ある情報をそのまま停止させているだけか。実験したかいはあったようだ」

人が一生懸命戦っているのにどうやらトゥーレはお遊びにすぎないようだ。もう飛んでいる必要もないのか、足を地におろしていた。それでも念の為なのだろう、近くの二階建ての屋根の上に降りて十樹を観察している。

「ふふ。イヴ、あなたのパートナーはどうやらこの程度のようね。地面に這いつくばって私たちを見上げてくるだなんて無様だわ」

「カグヤあんたいい加減にしろよ」

「凄んでも無駄無駄。あなたはもう私に勝てないのよ。どんなに粋がっていてもね」

「黙れ、これは僕の戦いだ。邪魔をするな」

「ごめんなさい。でも少しだけお願いトゥーレ。私に時間を頂戴」

「ふん。従者の頼みを聞くのも主の努めか。いいだろう少しだけだ」

「ありがとうトゥーレ」

「念の為にもう一回しておくか」

トゥーレが言うと体にかかる重圧が更に増し、骨が嫌な音を立てていた。

「あ、ぎ、ぎっ」
「十樹しっかりしなさい！」
「十樹さん頑張って！」
　応援をされはするが、どうしようもない。能力の温存なのか重力の重さからは開放されはしたが、何とか立ち上がるのが精々で、膝に手を付き肩で息をしていた。しかも骨が折れているのかヒビが入っているのか、呼吸するだけ痛みを伴っている。
　傷つきにくい体になっているとイヴは言っていたが、やはり限度はあるようだ。逆を言えば普通ならばとっくに死んでいてもおかしくはないということなのだろう。
「最高位から地に落ちた女神とそのパートナー。本当にあなた達お似合いね」
　カグヤは一人降りてきてイヴの目の前まで行って尚の事煽る。
　どうしてそこまでするかなんて知らないが、目の敵にしているのは終始変わることはないようだ。
「っあんたずっとこの時を狙っていたわけか」
「ご明察。長かったわ。三千年前からずっと、ずーっとこの瞬間を作る舞台を考え続けたのよ」
「キモ、ストーカーか何か」
「あなたが私をぞんざいに扱うからでしょ！」

カグヤの地雷に触れたのか、唐突に激昂する。
「私がいたのに、私だっていたのに。なのにあなたは！」
カグヤは手の平に一つの球体を作り上げる。それが何なのかなんてわからない。イヴも同じく作ってはいるが、嫌な予感がした。
故にふらつく体を押して向かった。
――これなら。イヴに作ってもらった時計なら。
左手首に巻いていた時計を外して右手へと握りしめ、今正にイヴへ危害を加えんとするカグヤへ殴りに行った。
少しでも助けになればと思っての行動だ。
そして予想通りカグヤは切り替えしてこちらを狙ってきた。
「邪魔だぁ！」
放とうとしていた球体は腕時計へクリーンヒットする。これはイヴと同等か、それ以上の力がないと壊れない時計。故に信頼していた。が、
「がああああああああああああああああっ」
腕時計は砕け散り、同時に握りしめていた右腕が折れる感触が伝わってくる。右腕で折れていない箇所がわからないくらいに。
「十樹！」

イヴが叫ぶ。
「貰った！」
カグヤは勝利の笑みを浮かべる。
イヴの躊躇いをカグヤは見逃さなかった。
油断したイヴの、人間で言う心臓部カグヤは貫いてみせる。
「――――あ、あぁ」
「イヴ、イヴ！」
「とお、き」
イヴが見せるはずないと思える悲しそうな顔をし、手をこちらへ伸ばしてきた。
他なんて何も目に入らない。ただ手を伸ばし、握ろうと十樹も懸命に手を差し出したが、
「さようなら、イヴ。私の中で眠りなさい」
カグヤが引き抜いた瞬間。イヴは目の前で消え失せた。
「イヴ、イヴ？」
探す。周囲を見てみるも、どこにもイヴはいない。
いつの間にか歓声も鳴り止んでいるが、それすら気付かずに十樹はイヴを探す。
「シモーヌ、イヴがいないんだ。何処か、知らないか」

「わ、私もなにがなんだか……」
　二人して右往左往し探すも見つからず、そこへ声が降ってくる。
「イヴは消えたわ。私の中に永遠にね」
「そんなイヴ様っ」
「嘘だ！」
　シモーヌは崩れ落ち、自分はというとカグヤに食って掛かる。しかし力の差は歴然。容易に弾き飛ばされてしまった。
「ま、そのうち別の神がやってくるから安心なさい。もしくはどうしてもと言うなら私がかわりにやってもいいわよ」
「……るな」
　口が自然と動く。
　痛みなんて最早どうでもいいほどに、体は自然と動いていた。
「ふざけるな！」
　もう一度殴りに行くが、ため息交じりの腕振りだけで吹き飛ばされる。
「ふぅ、あなたは理解力があるからトゥーレとどっちにしようか悩んでいたけど、トゥーレにしてやはり正解だったようね」
「何を、言っている」

「あぁそうか知らないか。じゃあ最後に教えてあげる。あなたを殺したのは私なのよ。イヴをこの世界に来てもらうのに利用させてもらったの」
「なん……だと……？」
　こいつは一体何を言っているんだ。この世界には不慮の事故。本来あるべき運命よりも先に死んだものがここへ来るはずだ。だというのにカグヤが自分を殺した？
　なんとも馬鹿馬鹿しい言い分だろう。
「信じてないようだけれど本当よ。あなた駅のホームで待っている時に背中を押されて死んだでしょ？　あれ私」
　自分が死んだときのことは薄っすらとだが覚えている。けどそれを知っているからといって証拠にはならない。まだ神の力で知っただけかもしれないからだ。だがイヴと同程度の力を持ち、そのイヴを消した。
　目の前に自分の仇と言いはる存在が現れて、はいそうですかと言えるほど上等な頭はしていない。そんなことを言われても混乱し、頭がパンクするだけだった。
「で、どうする？　仇でも討つ？」
「うるさい」
　ボソリと呟いた。
　カグヤには聞こえなかったのか首を傾げているようだが、関係ない。

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい！」
「な、なんなの急に」
「急な訳あるか馬鹿。それだけ煽れば誰でもそうなる」
トゥーレが説明してくれたが、そんなことはどうでもいい。
まだ戸惑いは大きいが、それでも一つだけハッキリしていることがあった。それはもう一度イヴのいる時間に戻りたい、ただそれだけだ。
そこで一つの可能性に行き着く。
「時間が戻る……」
口にした瞬間カグヤがぎょっとした顔をするのを見て、途端にグチャグチャだった頭の中が一瞬でクリアとなり、即座に頭が回りだす。
「主観時間で言えば時間は未来に向かって動くもの」
「トゥーレ早く十樹にトドメを」
「トゥーレだって重力を下から上にやっていた」
「何故僕がお前の言うことを聞かなければならない」
「なら、過去にだって動くはずだ」
「やめなさい。それは人間の枠を越えるわよ！」
カグヤが説得をしてくるがもう遅い。

体の内側にある時を動かす能力を開放。本能が警鐘を鳴らすがどうなろうと知ったことではない。もう十樹の中で覚悟は決まっていたのだから。

「俺は、時間を過去へ動かす！」

宣言した瞬間、視界はブラックアウトした。

第四章四幕　神の規律

視界が消えたのは一瞬だった。
次に目を開けた時は地面に倒れ伏し、全身がきしむように痛みが走る。
「十樹しっかりしなさい！」
「十樹さん頑張って！」
再び耳にするイヴの声と姿が記憶とリンクする。が、体の調子は同じではなかったようだ。
「がふっ、ごふっ」
口の中から大量の血を吐き出し、地面を紅く染める。心なしか呼吸も上手くできない。ただくらっと意識が飛びそうになったものの、痛みで覚醒してくれたのは嬉しい誤算だった。
「トゥーレ何もそこまでしなくても」
「いや、そんなに強くした覚えはないのだが……」
聞き覚えのない台詞を言っているが、どうやら過去に戻ったことは変わりないようだ。左腕を見れば腕時計は健在で、しっかりと時刻を刻んでいた。

「ふん、最高位から地に落ちた女神とそのパートナー。本当にあなた達お似合いね」
「っあんたずっとこの時を狙っていたわけか」
どうやら流れは同じようだ。しかしならば急がなくてはならない。このまま這いつくばっていては同じことの繰り返しになりかねない。何故なら、あのカグヤはイヴと同じだけの力を持っているか、最悪上だからだ。
腕時計が教えてくれたカグヤの実力を考えれば、恐らく拮抗ではなく上のはず。
全身全霊をかけて立ち上がり、治っている右手に再び腕時計を握りしめる。
「イヴ！」
二人の神がやり取りをしている間を割り込むように名前を叫ぶと、彼女はこちらを一瞬だけ見てくれた。その時に心臓部分を親指で指す。
「あなたが私をぞんざいに扱うからでしょ！」
――俺がこれからどうなっても攻撃は止めるな。絶対に。
これで伝わったかどうかはわからない。
イヴは以前心を読まない宣言して以来読んでいる素振りはなかった。だからこんなことで伝わるかは完全に賭けだった。
「ごふっ」
再び血を吐き出すも口元を拭い、足を前へと差し出す。

「私がいたのに、私だっていたのに。なのにあなたは！」
最早倒れるように十樹はカグヤに向かって力弱いながらも拳を突き出した。
「邪魔だぁ！」
振るわれた光球は歴史をなぞるように壊れ、粉砕される。腕を襲う痛みも同じだが、体がボロボロため痛覚が麻痺でもしているのか殆ど感じられず、倒れながらもただ叫ぶ。
「――――今だ！」
一瞬だけ。
刹那にも満たないかもしれない一瞬だけイヴの時間を早めた。
「しまっ」
カグヤは焦り顔を浮かべる。
「貰った！」
イヴはしたり顔をしながらも腕を突き出す。
十樹の賭けは、成功していた。
切り替えして振るうカグヤだがイヴのほうが早かったようで、イヴの腕がカグヤの心臓部を貫いていた。
「――――あ、どう、して」

「どっかの馬鹿が私のために無茶してくれたからよ」
　腕を引き抜かれ、体に力が入らないのかカグヤがたたらを踏み、ぐったりとした状態でこちらへ視線を向けてくる。
「あぁ、時間、を……」
「そういうことよ」
　自慢気にイヴが言ってくれるのは嬉しいが、そろそろ十樹は限界だったようだ。倒れたまま意識が遠のきかけたところで、聞き慣れた指パッチンの音が届いた次の瞬間、覚醒し体の痛みも消えていた。
「え、え？　なんで？　能闘士（サバト）の集いの間は干渉したら駄目なんじゃ……」
「まったくもってその通りよ。でもあんたよりもっと馬鹿な奴がやらかしたから面倒なことになったわ」
　「どういうことだ」と言いかける前に、世界が、割れた。
「もうおいでなすったようね」
　イブが空を睨みつけており、釣られて見るもそこには何もいない。
　念の為にと周囲を見渡しても何もいなかった。いたはずの観客も全て消え失せている。
　何が起きているのかと焦りが生まれるが、それに応えるように声が聞こえた。耳でな

く直接脳内に。
『規律を破った神よ、今罰を与えん』
規律を破ったとはイブのことだろうかと視線を向けるが、睨んでいるだけで怯えた様子は欠片もない。しかしカグヤはゆっくり後退りしており、顔は恐怖に歪んでいた。
「あ、俺に攻撃したからか」
「わかったようね。はぁ、あんなんでも私の配下ってなるなら、お遊びならともなく命かかってるし助けるしかないか」
「ちょ、わかるように」
「神は規律を破ると、いたという痕跡を全部纏めて消されるのよ。そうなると歴史の中からもいなくなる。始めからこの世に存在しなかったように扱われるのよ」
そこまで言われてやっと理解した。今この場に最高神が来ていることを。
「それは聞き捨てならないな。カグヤは僕のおもちゃだ。勝手に消えてもらっては困る」
「でしょうね。それは私も同じよ」
「なにかできることは」
「ない。私がどうにかする以外には」
「そうかわかった。従者が世話をかける」

イヴは簡単に言うが、この状況をどうにかできるとは到底思えない。
「勝算は、あるんだろうな」
「当然でしょ。じゃなきゃ気まぐれで相手をするような神じゃないのよ」
胸を張って言い切ると、持っていた光球を胸の内に入れ、パチンと指を弾いた。するとイヴの隣で空と同じように空間が割れ、そこからもう一人のイヴが表れた。
「偉い面倒なことになってるようね。しかもあれ時界神(じかいしん)だし」
一目で状況を理解したのか、言いたいことを言うと二人のイヴは重なり合い、一つへと変化していた。
「ひょっとして……」
「これが純度一〇〇％の私よ。あぁ今はカグヤの力を意図的に一部引き抜いているから相乗的に上がってるけど」
「レベルが最高だったのは嘘だったのかよ……」
「それは本当。今はカグヤの力を取り込んで上限を更に引き上げただけよ」
最早何でもありだなと呆れてしまう。
しかしだからだろうか、不安などはどこにもなく、安心して彼女を見ていられた。
『邪魔をするのか』
「えぇそうよ。悪いけど消されたら私も困るのよ。そいつ私に相手されなくなって癇癪

起こしてただけだから、見逃してもらえないかしら」
『ならぬ』
時界神がざわりとささやくだけで、戦うための舞台として作られていた空間が音を立てて消えていった。
残されたのはイヴとカグヤ、十樹の三名だけ。シモーヌとトゥーレはいなくなっていた。
「シモーヌ、トゥーレ！」
叫んではみるが返事はなく、周囲の闇色の中へと消えていくだけだった。
「二人は元の世界に戻されただけよ」
イヴが言うのだから間違いないのだろう。となると今度は自分が残されたことが不思議なのだが、聞くよりも前にイヴは答えてくれた。
「あんた過去に戻ったでしょ。あれの影響で二重にカグヤが禁を犯していることになるからそのせいよ」
「人間の枠を越えるとか言われたけど、それと関係があるのか？」
「まぁそんなところよ。要は使ったタイミングが最悪だっただけ。後はあんたにはまだ早かったから止めようとしたのよ。今はもう治してるからいいけど、あんたあのまま放置してたら一分もしない内に死んでたくらいには重症だったし」

「そこまで酷かったのか!?」
　考えもしなかった。能力の反動は生命力を失いうことだけだと思っていただけに、予想外だ。
「だってあんた自分の限界越えて能力使ってたでしょ。火事場の馬鹿力でやったようだけど寿命を纏めて燃やして、しかも反動（バックファイヤ）で全身ズタボロだったのよ」
　十樹が求めるよりも先に、どういう状態だったのかを脳内に送られてきて、思わず顔をしかめてしまった。
　脳へのダメージから始まり内蔵は全部スポンジのようになっており、至るところで出血をしていた。全身の筋繊維もズタズタで動けていたのが不思議なほどだ。
「ま、見直したわ。十樹」
　イヴに笑顔を向けられ思わずドギマギする。
　だが今はそれどころではないと無理矢理に思考を切り替えた。
『規律を守らねば、時間は壊れてしまう』
「ええそうね。それは重々承知よ。実際壊れた世界（じかん）があることも。そしてこの世界（じかん）に隣接しているところが今崩壊しかけていることも」
『ならば何故』
「何故も何もないわ。今回のことで世界（じかん）に負担をかけたようなら私の方で補填はする。

私の配下と私のパートナーがやらかしたことだし、キッチリ責任は持つわ」
「どういうことだイヴ」
犠牲になるだなんて聞いていない。
それでは何のために助けたのかわからないではないか。
「早とちりするな馬鹿」
しかしピシャリと言い止められ、大人しく見守ることに。
「どう、今の私なら歪んだ分程度は簡単に補えると思えない？」
『可能だ』
「ならさっさとやりましょ」
『月の神カグヤ、それでよいか』
「イヴぅ……」
「あんた何泣いてんのよ」
「らって、らって……」
あれだけ言い合いをし、果てには殺し合いをしていたように思えた二人だが、カグヤはイヴの胸の内で泣いていた。
――ひょっとしてカグヤってイヴのことが好きで、愛憎が裏返っただけなのか？　可愛さ余って憎さ百倍的な。

すがりつくように泣いている辺りそういうことなのだろう。言われてみれば近いことを口走っていたことを簡単に思い出せた。

そうなるとこれまでの苦労はなんだったのかと思わず肩を落とす。

「ま、カグヤのことは私の顔に免じて許してやって」

「わかったよ。お前もさっさと帰ってこい。でないとあることないことシモーヌに言っちまうぞ」

「ふん、やれるもんならやってみなさいこのグズ」

「お、そんなこと言うかこの駄女神」

互いに罵り合うが、前のような不愉快さはない。

「カグヤ、あんたも帰ったら言うことあるうちに来るように。逃げたら承知しないから」

「うん、うんっ」

頭を叩くイヴを合図に、カグヤは涙を流し鼻水をすすりながらも離れる。

「じゃ、行ってくるわ」

軽い言葉を残してイヴは消えていき、それと同時に視界は瞬時に切り替わり、周囲を見渡すといつものダイニングキッチンへと戻っていた。

カグヤがいないことから各拠点へ戻したのだろう。しかし、やはりと言うべきか、いるのはシモーヌだけでイヴの姿はどこにもなかった。

「ご無事でしたか十樹さん！」
戻るやいなやシモーヌが駆け寄ってくる。
彼女は上から下までじっくり見ており、ちゃんといることを確認しているようだ。
「よかった……いつものように戻ったのだと思いましたら、二人共どこにもおられなかったので心配していました」
「悪い。ちょっくら呼び出しをくらった」
「ところでイヴ様はまだですか？」
「あぁ、あいつならそのうち帰ってくるよ。いつかはわからないけどさ」
いつもイヴが座っていた席はもぬけの殻。
誰も座っておらず、戻ってくる気配もない。
でもいつかは戻ってくることを願い、今だけは郷愁を胸に、主のいない空っぽの椅子をじっと見つめるのだった。

エピローグ

最終戦から一夜明けた朝。
澄んだ空気は気持ちよく、十樹は一人ベッドの上で背伸びをした。
首を左右へ振ると、小気味よく音を立てて関節が鳴る。
「今日も目覚めは快調だな」
掛け布団を剥いでから履き慣れた黒にライムカラーの線が入った運動靴に足を入れる。
ブルーのパジャマを着ており、着替えてから下へ降りようかとも思ったが、特に予定もないことからそのまま自室を出て一階へ下る。
階段を降りている時にはすでにいい匂いがしており、寝起きの体なのに胃袋が誘惑されているのが十分すぎるくらいにはわかった。
「おはようシモーヌ」
「おはようございます十樹さん。もうすぐできますからちょっとだけ待っていてください」
チラリとフライパンの中身を見ると、スクランブルエッグを作っているようだった。

既に皿にはベーコンとトマトが乗っており、殆ど完成間近なようだ。
——今のやり取り、新婚みたいでいいな。
シモーヌとの言葉の掛け合いに、一人ニヤけているとツッコミが入る。
「あんた今相当キモい顔してるわ。考えてることが筒抜けよ」
「うっさい。妄想くらい許せ」
花が咲き誇っていた脳内から一辺、一気に萎れていってしまった。
それもこれも向かいの席にいる地球の女神、イヴのせいである。
「昨日はあんなに私のことでむせび泣いていたのに、もう別の女の尻を追いかけ回すとか、プレイボーイか」
「誰がむせび泣いたんだ。というかプレイボーイってなんだ？」
「あぁそっか、これはちょっと前の言い方か。え～っと遊び人とかそんな感じよ」
満足の行く回答が見つかったのか、笑みを浮かべながらもイヴは答えていた。
「誰が遊び人だ」
時間の修復とやらで消えた彼女が戻ってきたのは昨日のことだった。
そう、昨日である。それも十樹とシモーヌがイヴの座っている椅子を眺めていると、唐突に戻ってきたのだ。
壊された空間から十樹が帰還して一分か二分しか経っていない。暫く会えないのだ

と思って、色々あったことを思い返していたところに帰ってきてしまったため、情緒もへったくれもなかった。
「できました。どうぞ召し上がってください」
シモーヌの料理も完成したのか、テキパキとテーブルへ並べていく。
今日のメニューはイギリスパンに昨夜の残りのオニオンスープ。スクランブルエッグにカリッと焼いたベーコンが乗っていた。
「ソースはお好みでどうぞ」
そう言ってテーブルに陶器が置かれた。あの中にはトマトソースが入っており、シモーヌのお手製だ。これがまた絶品で是が非でも使いたく、手をのばし掴み取った。
「あ、何神より先に使ってんのよ」
「いいだろそれくらい。直ぐ渡すんだから」
小さいことを気にする神だと思いながらも手早くソースを皿へと落とし、陶器をテーブルの上をこすらせるようにして投げる。が、途中で止まってしまった。
「下手くそ。届いてないじゃない」
「そんなもんいつものように神の力でどうにかすればいいだろ」
「できたらとっくにやってるわこのハゲ！」
「ハゲてねーよまだふさふさだよ！」

つまらない言い合いをしているが、イヴが言っていることは事実だ。
帰ってきたあの日、イヴは力の大半を失ってしまったようだ。それだけ修復が大変だったのか、それとも代償に力を時界神へ差し出したのかは知らない。
ただ前ほど万能な能力は存在しないのだとか。
証拠と言うわけではないが、イヴは現在前着ていたヴェールのような服装ではなく、シモーヌお手製の黒いシャツの上にノースリーブの青いドレスを着ていた。
彼女曰く力の節約だそうだ。
それでも多少は力を使えるそうだが、力を行使するための原動力――――イヴ曰く天力というらしい――――が減っているとか。前はほぼ無限に近い有限だが、今は底が簡単に見えてしまいそうなほど浅い有限に変わったそうで、家の維持で一杯一杯なのだと嘆いていた。
修復がどれだけ大変だったかイヴは教えてはくれなかった。どうせ人間にはわからないと言って。
でも自分のことを気にかけてくれているのはわかるだけ、ちょっと、いやかなり嬉しかった。
腕に巻いている腕時計がその証だ。
なんでも力を失う前に作った品物だそうで、見た目は同じでもこれまでとは段違いの

性能なんだそうだ。今もつけていることを忘れてしまっていたほどにフィットしている。

「イヴ様どうぞ」

「ありがとうシモーヌ。やっぱどっかのクズと違ってシモーヌは優しいわ」

「それは悪ーござんした」

軽口を叩きながらもそっと腕時計に触れていると全員食べる準備ができたのか、手を合わせる。

いざいただきますと言いかけ、盛大に玄関を開ける音がしたことでそちらへ意識が持っていかれてしまう。

「イヴ。イヴー　いるのでしょ。なんで帰ってきたことを教えてくれないの」

聞き覚えのある声に思わずげんなりしてしまった。これから幸せな朝食の時間となるはずなのに。

イヴを見れば彼女もうんざりしてるのがわかる。

仕方ないと後ろを振り返ってみると、そこにはトゥーレと知らない女の人が立っていた。

「おはよう。飯食うか？」

「いや、帰ってから取ることにしている」

「そうか。で、そこの人は？」
もしやトゥーレの彼女だろうかと内心ヒヤヒヤする。
彼がこの世界に来たのも自分と然程時間的に変わらないことから、これがイケメンの力なのかと。
しかしそれは杞憂に終わる。
「だから慎重に行けと言っただろうが。お前が先走るから誰もわからずどうしたら良いのか困っているぞ、このグズ」
「ご、ごめんなさいトゥーレ。でも、でも」
「でももくそもない。あぁ、お前はクソだったな。いや豚か？」
「そ、そこまで言わなくてもぉ」
涙目を浮かべているが、顔は赤面している辺り嬉しいのだろう。そしてこの声と頭の上にあるうさ耳。
「まさかお前、カグヤなのか」
「ふふん、今更気付いたの。疎かな人間ね」
声は一緒だ。白いうさ耳も一緒だ。しかしブロンドヘアーだった髪は今や白く染まり、着崩していた和服の下から出ていた胸は消え失せ、しっかり着付けのされた和服は上から下までストレートだった。

「わかるかよ……胸ないし」
「うるさいハゲ！　人が気にしていることを言うとかデリカシーなさすぎよ！」
「髪の色が変わったり胸がしぼんだのは事実だろうがマヌケ」
そっくりな言い返しにチラリとイヴを見ると、一緒にするなと睨み返してきた。
「で、どのようなご用件で？」
「そうよそれよ。イヴ、あなた力はどうなったの。本体は平気!?」
カグヤはイヴへと詰め寄る。
「見ての通り貧弱よ。ま、死にはしない程度には平気よ」
「よかった～。私が殺すならともかく私のせいで死んだら嫌だもの」
「そんな戯言を言うのはこの口かしらね」
「うぶぶぶぶぶぶ」
イヴに両頬を掴まれたカグヤは情けない声を漏らしていた。
二人のじゃれ合いはどこからどう見ても神のそれではないが、微笑ましくはあった。ただ人様の神相手にあのようなことをしていて問題ないのだろうかと気になり、トゥーレへ問いかける。
「いいのか、あれ」
「問題はないよ。それにあなたの女神とは気が合いそうだ」

「そういや似たようなことをあいつも言ってたな」
「それは光栄なことだな」
サディスト同士気が合うのか。それともカグヤがどうみてもマゾヒスト体質だから苛め仲間として認めあっているのか、十樹にはわからない。ただ二人は共感しあっている様子で、そこへ飛び込みたくはないものだ。
「そういや今日だっけ、能闘士（サバト）の集いの賞金が貰えるの」
「あぁ、ギルド本部に専用の窓口があるそうだ。そこへ手続きすると貰えるらしい」
「っとそれよイヴ。そのことでも話があるの」
聞こえていたのか、カグヤは掴まれていた両頬の手を惜しむように離しながらこちらの話を拾ってきた。
「今回は私たちの負けにしてほしいの」
「なんで？　あれは決着がついてないからドローになっているでしょ」
結局最終戦の行方はお流れとなってしまった。
能闘士（サバト）の集いでは引き分けの場合再戦という形は取られず、両者敗北という形で終わるのだそうだ。
そのため場合によっては一位が複数いることもある。
今回の成績は十樹とトゥーレは二勝一敗ずつであるため、必然的に両者が同率一位と

なってしまう。

　そして気になる賞金といえば一位の金額を一位の数だけ山分けとなり、二位の賞金は二位がいない場合次回以降に回され、その下からは順位に従って賞金が払われることとなっている。

　今回の一位の賞金は金貨百枚のため五十枚ずつ貰うのが普通なのだが、カグヤはそれがお気に召さないらしい。

「でも私が壊しちゃったし、私の責任だし」

「それを言ったらこっちなんて話にならないくらいけちょんけちょんにされたわ。ねぇ十樹」

「そこで俺に振るとか鬼お前は」

「確かにあのままなら勝てたな」

「トゥーレお前も冷静に判断するな！　いやまぁ、負けてたのは事実だけどさ……」

　やいのやいのと騒いでいると、シモーヌが手を叩いたことで視線が彼女へ集まった。

「食事が冷めてしまいますし、皆さん召し上がってください。お二人の分も今ご用意しましたので、よかったらどうぞ」

　シモーヌが話に参加してこないと思ったら、どうやらいつの間にかトゥーレとカグヤの分まで用意していたようだ。

「だが僕たちは」
「いいからここは受け入れとけ。シモーヌの飯は美味いぞ」
トゥーレを引き止める。拒むかとも思ったが、それ以上抵抗することはなく素直に席についた。
「え、ちょっとトゥーレ」
「お前もさっさと座れグズ。相手の厚意を無下にするつもりか」
「でも……」
「ほぉ、僕の言うことに逆らうつもりか。では一人で帰るんだな」
「わかった。わかったから一人にしないで」
しょんぼりしつつもノロノロと椅子へ腰掛ける。トゥーレはなんだかんだでカグヤに気を使っているのだろう。イヴに近い席を譲っているのだから。
――これでこっちの席が近かったから座った、なんて言われたらそれはそれで驚きだな。
ちょっとしたことを推測しつつも手を合わせるように促す。
「食べる時はこうやって手を合わせてやるんだ」
「知ってるわよ。トゥーレもやってたんだから」
そう言えばトゥーレが日本に住んでいたと言っていたのを思い出す。

ならばもう気を使う必要はないなと皆に視線を巡らせ、一斉に口にする。

「「「「いただきます」」」」

直後になり始める食器の擦れる音と話し声は、おだやかで実に家庭的な一面だと思いつつも、十樹はじっくりと噛みしめるのだった。